

魔法少女リリカルなのは？ ふもっふ

八神れっふいー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

孤独な少女——八神はやての前に突如現れた謎の生物。彼（彼女？）の名前はボン太くん。何故か最強なボン太くんがリリカルな世界を駆け巡る！

「ふもっふっふ？ ふもふもふも……ふもっふっふ！」「いや、何言うところの？」
魔法少女リリカルなのは？ ふもっふ、始まるよ！

目次

| | |
|-------------------|----|
| ボン太くん、現る | 1 |
| はやて、状況把握を試みる | 3 |
| ボン太くん、食事をする | 6 |
| ボン太くん、居候になる | 10 |
| ボン太くん、ポカ（ふもっふ）をする | 13 |
| ヴォルケンズ（ミニ）、現る | 17 |
| ボン太くん、散歩をする | 22 |
| ボン太くん、初無双する | 27 |
| ボン太くん、友達が増える | 32 |
| 金髪少女、未知の生物に出会う | 38 |
| アリサ、ときめきメモリーズ | 44 |
| サビーナ、海鳴視察任務 いちっ！ | 50 |
| サビーナ、海鳴視察任務 につ！ | 56 |
| ボン太くん、謎の少女と出会う | 61 |
| ボン太くん、痛い子と会う | 68 |
| はやて、温泉旅行に誘われる | 73 |

ボン太くん、現る

「ふもっふ」

「ふも……なんやて?」

私——八神はやては困っていた。

朝、私はいつも通りに起きたはずやった。いつも通りに車椅子に乗って、朝ご飯を作って、洗濯物を干して、図書館に行つて……そんないつも通りの、代り映えのない日常を過ごすはずやった。やのに、

「ふもっふ? ふもふもー!」

朝ご飯を作ろうとリビングに向かったら……謎の生物がいた。

見た目は、犬ともネズミとも見て取れる茶色の生き物っぽくて、頭には何故か軍用のヘルメットと……防弾ジャケット? みたいな物を身に着けている。

まあ、簡単に言うときき言った通り、謎な生物の一言で済む。と
うかそれ以外に表現出来へん。ホンマになんやねん、この生物。泥棒? ……いやいや、こんな奇抜な格好した泥棒おらへんやろ。

「えー……キミ、何なん?」

とりあえず聞いてみる。

「ふもっふ」

ふもっふ。

……いやいやいやいや。

「ふもっふじゃ何も分からへんよ。言葉、ちゃんとした言葉喋つてくれへんか?」

「ふも……」

私がそう言うと、謎の生物さんはその大きな頭を下に向けて俯いてしまった。

あ、ああ! それは言っちゃいけないかったんやろか!? も、もしかして喋れないとか? し、しもうた。私、なんてことを……。

「ご、ごめんな謎の生物さん。私、そんなつもりで言つたんとちゃうん

よ」

「……ふもっふっふっ」

「そ、そやそや！ ふもっふや！ ふもっふー！」

「……ふもー」

とりあえずふもっふと返してみたら、謎の生物さんも嬉しそうにふもっふと返してくれた。

……今の通じたんやろか、私は全然分からへんねんけど。

「……あ、そや。謎の生物さん、ペン持て……なさそうやな、その手じゃ。しくつたなあ、せめて名前は知りたかったんやけど」

紙に名前書いてもらおうと思っただんやけど……指が無くて丸っこいその手じゃ何も持てへんやろうしな。うーん、謎の生物さんで呼び続けるしかないんか？

「ふも？ ……ふも、ふもふもふも……ふもっふー！」

「ふえ？ どうしたんや、謎の生物さん……って、これ！」

私が悩んでいると、謎の生物さんは右手に持った紙を差し出してきた。謎の生物さんの左手にはちゃんとペンが握られており、紙にもちゃんと文字が書かれていた。

す、凄いやんか謎の生物さん！ ペン持てたんやな!? そ、それで謎の生物さんの名前は一体……？

「……ボン太くん？」

「ふもっふー」

私が紙に書かれていた名前を呼ぶと、謎の生物さん——ボン太くんは元気に返事をした。

——これが、私とボン太くんの出会いやった。

はやて、状況把握を試みる

「ボン太くんって言うんか？ 謎の生物さん」

「ふもっふー！」

一応確認のためにもう一度名前を呼んでみると、謎の生物さん——
ボン太くんは『肯定だ』とでも言わんばかりに元気良く返事を返した。

ボン太くんかあ。まあ、確かにこの見た目はなんか知らんけど『ボン太くん！』って感じがするしなあ……って、何でそんな感じするんやろ？ プレッツシャー？ いや、それはなんか違うか。

「ふもっふー！」

「ん？ ああ、大丈夫やよ。ちよつと考え事してただけやから」

俯いて考え事をしている私を見て具合が悪いとでも思ったのか、ボン太くんが心配そうに声（鳴き声？）を掛けてきた。

「ふも、ふーも？」

「あはは、ホンマに大丈夫やから。心配してくれてあんがとな」

ボン太くんが何て言ってるのかは全然分からへんのやけど、心配してくれてるってのはなんとなく分かる。

……まあ、ホンマになんとなんやけど。

「……あ、そや。というかボン太くんはどうしてここにいたんや？
はい、ペンと紙」

ボン太くんが何故ここにいるのか、という真っ先に聞かなければいけないことを聞いていなかったの、ペンと紙を差し出す。名前書けたんやからどうしてここにいるのかも書けるやろ。

ボン太くんはペンと紙を受け取って、紙をテーブルの上に置き、作業に勤しみ始めた。

……しかし、なんであんな指も何もない平つたい手でペンを持って、更には文字も書けるんやろ。これから先、決して分からないであろう疑問が出来てしもうた。まだ八歳やのに。

「ふもっふー！」

「お、書けたんか？ どれ、見してみい」

「ふもっ！」

ボン太くんが差し出した紙を受け取ると、ボン太くんは『自信作だ！』とでも言わんばかりに防弾ジャケットを着た胸(?)を張った。ただ紙に書くだけなんやから、自信作も何もないと思うんやけど……どれどれ。

『神さまに『キミ、夢想転生してきなよ』って言われた後、目が覚めたらここにいたんだよ』……ふむふむ、なるほど……って、アホか！」「ふもっ!？」

私がテーブルに紙を叩きつけると、ボン太くんは驚いて、『何故!?!』とでも言いたそうな声を上げる。

いや、だつておかしいやろこれ！ 神さまが出て来たで!?! 夢想転生出て来たで!?! なんや、その神さまは世紀末の神さまなんか!?!

「ハア……まあ、ええわ。とりあえず気づいたらここにいた、で。しかし、これからどないしよか……」

「ふもっ！」

「いや、ふもっ？ やなくてな？ キミに関わることなんやで？」

まだ出会ってから十分も経つとらんのに、ボン太くんが何言ってるかなんとなく分かるようになってしもうた。悪いことではないんやけど、何故か複雑や。

「……そや。この後、石田先生んどこ行くんやつた。石田先生に色々相談してみるかな」

「ふも……ふもっふもっふもっ！」

……この、意味が分からなかったけどとりあえず元気良く返事しとけばいいって考えてそうな生物について、色々とな。

「あー、その前に朝ご飯やな。ボン太くんも食べるやろ?」

「ふもっふもっ！」

「よし、そんじや適当になんか作るから待つてて——」

と、そこまで言つて気づいた。気づいてしもうた。

「……ボン太くんつて、そもそも食べ物食べられるん?」

「……ふもっ！」

八神はやて、八歳。

再び、分からないことが増えそうな予感です。

ボン太くん、食事をする

お父さん、お母さん。はやては今、困っております。

「……………これ。口、やよね?」

「ふもお……………」

ボン太くんのωみたいな口らしき部分を触る。するとボン太くんはくすぐったそうな声を上げおった。

……………ええ? くすぐりたいんやったら、やっぱ口なんか?

「いや、でも……………ちよおボン太くん。口開けてみてくれへん?」

「ふも?……………ふうもおく……………!」

ボン太くんは両手で口(?)をこじ開けようと……………タイムタイムタイム!
イム!?

「え、何?! そない原始的な方法でないと開かへんの!? そんなんやったら無茶せんでええよ! 仮にそれで開いたとしたら、とんでもない光景になるから止めて!」

「ふも……………」

いや、なんでそんな残念だ、みたいな声を……………しかし、ホンマにどかないしよ。口が開かないんじや、何も食べれへんし……………。

「……………ふもつふ!」

「ふえ? どうしたん?」

私が悩んでいると、ボン太くんは突然台所にある冷蔵庫に向かって歩いて行って、徐に冷蔵庫の中を漁り始めた。私はその光景を暫く眺めていると、ボン太くんは何かを発見したらしく、その何かを持って私の方へ戻って来た。彼(彼女?)の手に握られているのは、

「魚肉ソーセージ?」

「ふもつ!」

ボン太くんは何故かその平ったい手に魚肉ソーセージを一本持っていた。ボン太くんは左手も活用して、魚肉ソーセージのカバーを外し始める。

その非常にシユールな光景に、私は暫し呆然としてしまったが、ボン太くんが魚肉ソーセージのカバーを全部剥き終わった後によ

やっと我に返り、ボン太くんに声を掛ける。

「いやいや、ボン太くん。カバーを外したんは凄いと思うけど、ボン太くん口が無いんやから……」

「ふも、ふもっふもっふも」

「え? 『騙されたと思って見てて』やて? 今の状況自体騙されてるんやないかって思つとるんやけど……まあ、ええわ。そのソーセージをどうするつもりなん?」

ていうか、どうして私はボン太くんの言っていることが分かるようになったているんやろう。さつきまでなんとなくでしか分からへんかったのに……またしても複雑な気分や。

「ふもっふも……もっふるー!」

ボン太くんが良く分からない声(多分気合いを入れるためのものやと思う)を上げて、開かないω口(?)に勢い良くソーセージを近づける。

……だからボン太くん。そのω口は開かないことはさつきのやり取りで……なっ!

「なん……やと……? ソーセージが、ない……!?!」

「ふもっふー!」

ボン太くんは中身のソーセージがなくなったカバーを私に見せる。確かにその中に先程まで入っていたソーセージは綺麗さっぱり無くなっていた。

ど、どういうこっちゃ! いつの間に……というか、どうやって食べたんや!?

「ちよ、ボン太くん! 今のどうやってやったん? さつきまでω口開かなかったやろ、どっかに放り投げたりしたんちゃうんか!?!」

「……ふもっふも」

私がそう聞くと、ボン太くんは首を左右に振った後、周りを見渡す。それにつられて私も周りを見渡すと、見た限りではソーセージは見当たらない。

く、くう……! 一体どうなってんねん! ハッ、まさか……、「ボン太くん。身体のとっかでソーセージ潰したんとちゃうん?」

「ふもっ!？」

あ、あからさまなりアクションとりよった! むう、そんなズルツ
こい技(?)を使うなんてセコいで!

「ほれ、どこで潰したんや!? 見してみい!」

「ふ、ふもっふもっふもっ!」

「わっ、抵抗すなや! ここらが年貢の納め時やで!」

「ふも〜!」

ボン太くんに近寄って、ボン太くんの身体中を触って調べる。むっ

! ほれ、頭と胴体の間の首らしき部分にソーセージの残骸が……ん
?

私は両手で目を擦った後、再びボン太くんの頭と胴体の間を見る。

しかし、目に飛び込んでくる光景は変わらない。な、なんやねんこれ
……!

「繋ぎ目があるやと……? ま、まさかボン太くんは!？」

|||||

|||||

「——ということがあったんですよ」

あの後、結局ボン太くんの謎は解けなかった。もしかしたら頭が外
せるのかと思って引っ張ってみたけど、全然外れなくて、ボン太くん
自身も抵抗したので諦めた。

で、今は病院の診察室において、私の主治医である石田先生に今日の
朝から今までに起きたことを説明し終えたところや。

「なるほど。つまりはやてちゃんの後ろに立ってるボン太くんが、生
き物かと思ったら人が入っている可能性がある……ねえ、はやて
ちゃん」

「はい? なんですか?」

私の話を黙って聞いてくれていた石田先生は、私の後ろに立ってい
るボン太くんを見た後、私を見て……言う。

「カメラはどこ?」

「すいません、ドッキリやないんです。ボン太くんなんです」
「ふもっふっ」

キミはどこでも呑気なんやね、ボン太くん。

ボン太くん、居候になる

「はやてちゃん。大人を馬鹿にしちゃ駄目よ？ ドツキリよね？
ドツキリなのよね？ このボン太くんははやてちゃんが連れ去って
来た着ぐるみなのよね？」

我が家に突如現れた謎の生物（人間の可能性有り）ボン太くんを石
田先生に見せたら、石田先生はえらく必死にボン太くん着ぐるみ説を
推し始めた。ど、どうしたんやろ？

「ちよ、石田先生落ち着いてください。ドツキリやありません、ボン太
くんです……あれ？ というか先生、ボン太くん知ってるんですか
？」

「ふも？」

まさかボン太くんは意外とメジャーな生物なんやろうか。図書館
大好きツ子（自称）である私は今まで生きてきた八年の人生の中で数
多の本を読み漁ってきたと言うのに……そんな私が知らへん生物が
いると言うんか？ ……いや、いっぱいおるとは思うけど。

「知ってるも何も……ボン太くんって言ったら『ふもふもランド』のマ
スコットキャラクターじゃないの。地味に人気なのよ？ ほら、この
シャーペンとかボン太くん仕様よ」

そう言って石田先生は頭がボン太くんのシャーペンを見せてくる。
な、なんやと……？ ボン太くんって、そこまで有名やったんか？
く、くう……やっぱり私は時代遅れなんか？ 私って、私って……。

「……ふもっふ」

「ぼ、ボン太くん？ 慰めてくれるんか？」

「ふもおー！」

「あ、ありがとな。ありがとな、ボン太くん。ボン太くんは、私の心の
親友（とも）やー！」

「ふもっふー！」

診察室の中で私とボン太くんは抱き合う。

ああ、持つべきモノは友達やね。友達がいるだけで生きていける気
がするわあ。

「……あれ？ でもボン太くんがどうして私の家にいたのか解決してへん。石田先生、どうしてでしょう？」

「泣いたり悩んだり……随分と忙しいわね、はやてちゃん。……というか、それを聞く為にここに来たの？ 診察が第一目的じゃなくて？」

「はい、ボン太くん（診察）が第一目的です」

「何かが違う気がするわ……まあ、良いわ。確かそのボン太くんは神様に『キミ、『夢想転生』してきなよ』って言われたって言ったのよね？」

石田先生の問いに、私とボン太くんは肯定の意味を込めて頷く。

そんな私たちを見た石田先生は、顎に手を当ててじつくりと悩み込む……ことはせず、ゆつくりと口を開いて語り出した。

「私の昔からの友達に警官をやってる人がいるんだけどね？ 彼女、学生の頃から問題ばっかり起こして、よく私を振り回してたのよ。散々な毎日だった……けどその毎日の中で、私は彼女から大切なことを学んだの。本能のままに暴れ回って周りに被害を撒き散らす彼女から……『気にしたら負け』、という大切なことをね。だからね、はやてちゃん。ボン太くんがどこから来て、一体誰かだなんて……『気にしたら負け』よ」

「長々と語つといてそんな結論ですか!？」

「がっかりや！ がっかりやで、先生！」

私の心からのツツコミに、石田先生は「いやいやいやいや」と顔の前で手を振り。

「つい愚痴も言ってしまったけど、私には分からないわよ。だって神様よ？ この世界に神様なんているわけじゃないじゃない。もしいるとしたら、どうして高校時代に私を陽子の暴走から救ってくれなかったのよ！ 神様の馬鹿ヤロー！」

「……帰ろか、ボン太くん」

「……ふも」

そつとしてあげよう。心の底からそう思いました。

暴れ出した石田先生を取り押さえようと看護婦さんたちが慌てて

いるのを視界の端に収めながら、私とボン太くんは診察室を出る。薄情やと思うか？　これが人間や、人間ってやつなんや……今私、深いこと言った気がする。

「ふもっふー！」

『外道の極みだね！』やて？　ありがとう、最高の褒め言葉や」

「ふもお……う？」

ボン太くんの私に対する好感度が下がった気がする。気のせいやとええんやけど。

……しかし、得られた情報は『ボン太くんはふもふもランドの地味に人気なマスコット』『石田先生の旧友の婦警さんは凶暴』『石田先生は実は怖い』だけか。正直最初の情報以外はいらんかったな……いや、石田先生を怒らしちゃいかんってことが分かったのはある意味僥倖やったけども。

「まあ、別にボン太くんが居候する分には問題ないんやけどな？」

「ふもっふー！」

ボン太くんが不思議そうに首を傾げる。

ん？　分からへんのかなあ？

「キミみたいな生物かどうかも分からへんのを、道端に捨ててくわけにはいかんやろ？　それに、ボン太くんと一緒にいたら楽しそうやしな！」

「……ふもっふうー！」

「わっ!?　と、突然抱き付いてきたらビックリするやろ？」

「ふもっふもっふうー！」

こうして、私とボン太くんは一緒に暮らすことになり、私とボン太くんの慌ただしいファーストコンタクトは終わった。

……終わっただと、思ってたんやけどなあ。

ボン太くん、ポカ（ふもっふ）をする

4月3日。

今日この日、私の家に突然謎の生物……かどうかも分からない物体——ボン太くんが現れ、私の家族になりました。

朝から何やら慌ただしかった一日。そんな一日もやっと終わりを告げようとしています。

「何故だ！ 何故私たちは小さくなっているんだ!?!」

「わ、私にだって分からないわよ！ ぎ、ザフィーラどうして!?!」

「いや、お前たちに分からないのなら俺に分かるわけが無いだろう」

「あんだ、てめえ。あたしとやるってんのか?」

「ふも?」

……まあ、終わるわけなかったんやけど。

私の目の前には、頭に獣耳を生やした物静かそうな男の子。

彼の左には、桃色の髪をポニーテールに結んだ、凜とした女の子。

そして右には、金髪をショートボブにしたうっかり屋さんっぽい（私の予想）女の子が、三人で何やら慌てふためいて、強気そうな赤髪の女の子は何故かボン太くんを挑発していて、ボン太くんは意味が分からず頭を傾げている。

と、とりあえずどうしてこうなっているのかを確認せなあかんな。そうやな、そうしよう!

……決して現実逃避やないからな!

——回想開始——

「それじゃあ、私は晩御飯の下拵えするから……ボン太くんは……ボン太くんは……さて、準備するかなー」

「ふもっふ!?!」

暴走し始めた石田先生を必死で押さえこんでいる看護婦さんたちを見捨てた後、家に帰った私は晩御飯の下拵えを始めた。ボン太くんにも何か手伝ってもらおうかと思ったけど……うん、まあ仕方あらへ

んよな？ 何が仕方ないかは想像にお任せするで。

「……ふも〜」

私が冷蔵庫から食材を取り出し出していると、ボン太くんは物珍しそうに周りを見渡しながら、二階へと続く階段を登り始めた。

二階には私の部屋しかあらへんのやけど……あ、そうや、ボン太くんの部屋決めなあかん。部屋には余裕があるからどこか適当に……

と、そこまで考えたところで、私は重大なことに気が付いた。

「ボン太くんって、寝るんやろか？」

またしても謎にブチ当たってしまった。果たしてどうなんやろうか。ボン太くんが生物やったら寝ると思うんやけど……いや、どっちにしろ中に人が入ってるんなら寝るよな？ ハッ、もしかしたらボン太くんはロボットって可能性もあるかもしれへん！

「……あかん。考え出したらキリがあらへん。後でボン太くんに直接「ふもっふー！」ボン太くん？ どうしたん……って、その本は……」
「ふもっふもー！」

『上で見つけた！』とこれ見よがしに鎖が巻き付いている本を見せてくるボン太くん。

上で見つけたて、その本私の部屋に置いてあつたもんなんやけど……まあ、ええか。大して問題はあらへんし。

「その本読みたいんか？」

「ふもっふー！」

「そか……でも、見ての通り鎖が巻き付いてるから開かれへんし……って、ボン太くん何しとるん？」

「ふもっ、ふもふもふもー！」

私は、本に巻き付いている鎖を引き千切ろうとしているボン太くんを声を掛ける。ボン太くんは『私のパワーに掛ければ、この程度の鎖どうってことないよ！』と何故か自慢げに返してきた。

いやいや駄目やで、ボン太くん。読みたい気持ちは分かるけど、私がすっごく小さい時から傍にあつた本なんやから。そない乱暴に扱っちゃ罰が――。

「ふう〜もつふう！」

「あああああああ!？」

千切りおったあ!? 千切りおったで、この生物かどうかも分からん生物! あ、これじゃ結局生物や……って、そうやなくてえ!

「ぼ、ボン太くん!? 乱暴に扱っちゃ駄目やつて言っ……てへんけど! 雰囲気で分かるやろ、雰囲気でえ!」

「ふ、ふもふも……?」

『ほ、本が浮いてる……?』やて? なんや、適当なこと言って誤魔化そうとして……浮いとるツ!？」

ボン太くんが見ている方向を見ると、鎖を引き千切られた本が何故か宙に浮いていた。

……いや、いやいやいや! 浮いていた、とか冷静に描写しとる場合やないって私! なんやこれ! ボン太くんか? ボン太くんのせいやろ、これ!？」

『封印が外部から強制的に解除されました。よって、不完全ながらも起動します。』

………はあ、面倒なことになったなあ』

「ほ、ほれ見いボン太くん! なんかすっごいダルそうな声出してるであの本! ボン太くんのせいやで!」

「ふ、ふも、ふもふもふもつふ!」

『新しい知識を求めるのは、人間の性なんだよ!』やて!? そんな言い訳で許されると思ってるんか!? というかボン太くんって人間やっ——」

『起動』

「今度は光ったあ!？」

宙に浮かんでる本が唐突に光り始めた! 私とボン太くんは余りの眩しさに両手で目を覆う。………あ、目は普通なんやね。

ともすれば目を焼かれるのではないかと思うほどの光が収束していく。目を開けた。その先には——。

「闇の書の起動を確認しまし……って、おい! 何故お前たちは私の上に乗っている!」

「そんなの知らないわよ！　というかザフィーラ早くどいて！　重……あれ？　意外と重くないわね」

「……腕が短くなっている気がするのだが」

「なんでシグナムたち、あたしと同じぐらいの背になってんだ？」

「「なん……だと……？」」

三段に積み重なっている桃色の髪の女の子、金色の髪の女の子、獣耳を頭に生やした男の子と、その三人の横で冷静なツツコミを入れる赤髪の女の子がいた。

……いや、こつちがなん……だと……？　なんやけど。

——回想終了——

と、言うことがあったわけなんやけど……。

「れ、レヴァンティンまで小さくなっている……」

「魔力が全然無い!?　どうなってるのよお!?!」

「……動きにくいな」

「ふもっふ！」

「ふ、ふもっふ……？　うっ、なんだこの気持ち。こいつを見ると、なんだかあたし——」

……ああ。現実を直視したくないなあ。

ヴォルケنز (ミニ)、現る

「……ハツ、そういうえば何故か以前よりも身体が軽い気が……。何故だ？」

「困ったわ……。こんな魔力じゃ何も出来やしない……。ああ、何故こんなことに……」

「……ヴィータ。その生物は一体何だ？」

「ふもっふー!」

『ボン太くん!』って言ってるぜ?」

「そうか。……何故お前は言葉が分かるんだ?」

あかん。回想から戻った後、五分ぐらい現実から目を逸らしてたら更に混沌度合いが上がつとる。

なんや? この場を私がかせなあかんのか? ……まあ、このまま放つとくわけにもいかんし、しょうがないか。

「ふもっふ、ふもふもふもー!」

『私のふもっふは108式まであるよ!』だつて? す、凄いな。何が凄いのか全く分かんねえけど凄え!」

というかなんでキミは普通に溶け込んでんねん、ボン太くん。

「あー……。んっ、ごほんっ! はい、注目! 一旦落ち着きい!」

「何故身体が軽いんだ? ……そういうえば、特に胸の辺りが軽くなつたよな」

「ゆ、指が小さ過ぎてクラールヴィントが詰められない……」

「ふもっふ、ふもふも」

『そう、それは私が一人で留守番をしている時だった……。? な、何の前触れもなく昔話を始めんのか! 凄え!」

「何が凄いんだ?」

……。

「聞けやっ!!!」

『すいませんっ!』

あまりにうるさいので一喝してやったら、素性不明の四人は見事な正座をして見せた。

そやそや、それでええんや。最初っから素直に従っておけば私かて怒鳴らなくて良かったんやで？

「……ふもっふ」

『……悪役みたい』？ そか、キミも怒鳴られたいんか」

「ふっ、ふもふも!?!」

ちよつと脅しをかけたらボン太くんは後ずさって赤髪の女の子の背に隠れた。

……いや、大きさが違い過ぎるから隠れきれてへんのやけど……まあええわ。

「とりあえず。あんたたちはどこの誰様で、どういう事情をお持ちなのか。詳しく話を聞かせてもらおうやないか。

はい、そのポニ子ちゃん。説明しなさい」

「ほ、ポニ子？」

「ポニーテールやからポニ子ちゃん。というか名前知らんし……はい、名前も含めてちやっちゃと説明する！」

「は、はい！ ええと、私たちは——」

私の言葉に促されて、ポニ子ちゃんは説明を始めた。ちなみにボン太くんはまだ赤髪の女の子の背に隠れている。いや、だから隠れられてへんって。

|||||

「——と云うことです」

「ふむ……つまりあんたらは闇の書を護る守護騎士ヴォルケンリッター！ つちゅー奴で、闇の書はページが全て埋まると主……私の願いを叶えるロストログアって奴なんやな？」

「はい、その通りです」

「ふも、ふもふもお……」

『その爆発に巻き込まれて私は……』？ わ、私は？ ボン太くんに何があったんだよ!?!」

ポニ子ちゃん、本名シグナムが言うと、シグナムの横に並んで正座していた金髪のショートボブの女の子、通称ボブ——シヤマルに、頭に獸耳を生やした男の子、通称……通称……犬ことザファイラが賛同の意なのかうんうんと頷く。赤髪の女の子——ヴィータは話題の中心人物なくせにボン太くんと遊んでいる。……放つところ、面倒やから。

「それで、主はやての願いは何でしょうか？ 命令さえくだされば我々が今すぐにでも……」

「ちよ、主とか止めてーな。なんか背中が痒くなる。」

——というか、や。蒐集って人様に迷惑掛けんのやろ？ 駄目やで、人様に迷惑掛けちゃ。大体私、願いとか無いしなあ」

……あ、そや。

「私の家族になつてくれればええよ」

「は？ 家族……ですか？」

「そや、家族。私にボン太くんにシグナムたち。立派な家族の完成や。……嫌か？」

「い、いえそんなこと！ ですが、やはり蒐集は……」

「む。駄目やつて言ったやろ。てか、そのナリでどうするつもりやったん？」

シグナムとシヤマル、ザファイラを見る。三人は私と同じぐらいの背で、とても魔法が飛び交う戦場で戦いをする騎士とは思えない……って、ああ……今更やけど魔法って何やねん。今日は朝からボン太くんやらボン太くんやらボン太くんで色々あったから、魔法なんてもんがあるって聞いても驚けなくなつてもーた。これは人間としてどうなんやろ。色々麻痺しとらんかなあ？

私の言葉にシグナムたちは痛いところを突かれた、と言った風な顔をし。

「そ、それは……私たちはヴィータ以外は元々大人の背丈だったのですが……シヤマル。原因は分からないのか？」

シグナムは闇の書を膝の上に置いて調べている——んだろう。なんか緑色の光出してるし——シヤマルに尋ねる。

「……どうやらまだ闇の書が不完全な状態だったのに、外部からの干渉で封印が強制的に解かれたみたいね。それで闇の書は全員を不完全な状態にするよりもヴィータちゃんだけでも完全な状態にすることを選んだみたい。それで私たちはこんな姿とこんな魔力に……」

「……つまり、戦いになった場合まともに戦えるのはヴィータだけと言うことか。私たちはいつ戻れるんだ？」

「闇の書が修復を始めているみたいだけど……多分、三ヶ月以上はかかるんじゃないかしら」

「三ヶ月……それまで俺たちはこの姿と言うことか」

シグナムたちが一斉にガクつと肩を落とす。ま、まあ、元々が大人の姿やってのに子供の姿で三ヶ月過ごせっちゅーのは、確かにキツイかもなあ……。

「……………ん？ 外部からの干渉？」

なんとなく引っ掛かった。いや、引っ掛かったつちゅーレベルやなくて、そういうええばさつきボン太くん、闇の書に巻き付いてた鎖引き千切ったような……。

「ふもー！」

『秘技・鎖パンチ！』!? よ、良く分かんねーけど威力はありそうだな、それ！」

ヴィータと遊んでいるボン太くんの右腕には、ついさつきボン太くんが引き千切った鎖が……。

「な、なあシヤマル。その封印って……あれ？」

「あ、はい。あの鎖です……………？」

「どうしたシヤマル……………あ」

あ、シヤマルにシグナムが固まった。……あ、レヴァンティンって剣取り出した。

取り出した剣をずると引き摺りながら、ボン太くんの方に向かって歩いていくシグナム。シヤマルとザフィーラも背後に変なオーラを漂わせながらシグナムの後ろについていく。

え、ちよ、何を――。

「「お前かあああああ！」」

「ふもお!?!」

「う、うわあ!?! お前らどうしたんだよ!?!」

「問答無用! その犬だかネズミだか分からん生物を斬らせろお!」

「い、犬じゃねえ! ボン太くんだ!」

「どつちでもいいわあ!」

……慌ただしかった一日の次の日は、ご近所さんに謝りに回らな
きやいけなくなつたようです。騒音的な意味で。

ボン太くん、散歩をする

「……おはよお、はやて」

「お。起きたんやな、ヴィータ。朝ご飯もう少しで出来るから、顔洗ってきい」

「……うん。行く、ボン太くん」

「ふもつふう……」

ボン太くとヴィータたちが私の家に現れて家族になつてから3日経ちました。

3日経てば人間誰でも慣れるもので、私たち六人……いや、闇の書も含めた七人は家族として楽しく暮らしています。……間違えた、七人(?) やつた。

ボン太くんの左手を握りながら二階から下りてきたヴィータは、寝惚け眼を擦りながらボン太くと一緒に顔を洗いに洗面所に歩いて行く。……なんやろ、シユールや。良く分らんけどシユールや。

「只今戻りました、主」

「あ、お帰り、シグナム……って、その食べ物の方、どうしたん？」

『子供の身体になろうとも、私が騎士であることに変わりはありません』とか言つて身体を鍛える為に朝のランニングに行つていたシグナムが、何故か両腕に食べ物一杯抱えて帰つて来た。抱えている食べ物は果物に野菜、果てには魚など……選り取り見取りや。一体何があつたんや？

「……いえ、これはその……商店街の方まで走つて来たのですが、商店街の方々が『可愛いシグナムちゃんにはご褒美だ』と……わ、私は断つたんです。ですが、断り切れず……」

「それでその食べ物の方、つちゅーわけか。大丈夫やよ、シヤマルだつて昨日一緒に買い物に行つた時貰つてたから」

「そうでしたか……あれ、主？ 果たしてそれは安心していいのかどうか……主？ あの、無視しないでくれませんか!？」

あつはつはー、今日の昼は魚やな。焼き魚を作つて、その後は林檎切るんや。いやー、食費が浮いて助かるわー！

「ただいまです……あれ、シグナム。どうしたのよ、元気ないみたいだけど」

「大体『可愛い』とはなんだ？ 私は騎士だ、可愛さなどいら……ふっ、ふふふふ……」

「……シヤマル。放っておこう」

「そ、そうね……」

散歩から帰って来たシヤマルとザファイラが、ふふと妖しげに笑っているシグナムから距離を取る。

うん、そうや。それが正しい判断やで、二人とも。触らぬシグナムに祟りなしっちゅーやつやで！

「あー、スッキリした。……あん？ シグナムどーしたんだ？」

「ヴィータちゃん。触れないであげて、お願いだから」

「は？ まあ、いいけど「ふもふ」ん、何？ ボン太くん」

「ふもっふ、ふもふもふもっふ」

「ふむふむ」

ボン太くんが何やら話し始めたので、ヴィータがそれを通訳し始めた。

ボン太くんが使用(?)するふもふも語(私命名)を翻訳ないし通訳出来るのは今のところ私とヴィータだけ。シグナムたちは何故か翻訳することが出来ない。なんなんやろね、これ。何か条件でもあるんやろか……うん。勘やけど多分何もないんやろな。絶対そうや。

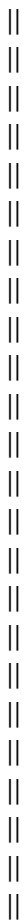
「なるほど……おい、シグナムー！」

「私は可愛くなど……なんだ？ ヴィータ。出来れば放っておいて——」

「『そんな可愛い顔と小さい姿で凹まれても更に可愛くなるだけだよ！』ってボン太くんが言ってるぜ?」

「……レヴァンティン」

……ああ。私はまたご近所さんに謝って回らなければいけないよ
うや。



は何故か上から目線で偉そうに尋ねる。

「神社ってなんだ？ どこにあんだ？」

「え、神社？ うーん、どう答えればいいのかなあ……って、うわ。どうしてボン太くんがいるの？」

ヴィータの横に立つボン太くんに眼鏡の少女は驚く。

まあ、そこそこの有名な遊園地である『ふもふもランド』のそこそこ人気なマスコットであるボン太くんが目の前にいたら、そりや驚くだろう。驚かない人はどこぞのまだ未登場な婦警さんと狂戦士化（バーサーク）した用務員ぐらいだ。

「なんでって……あたしの家族だけだ」

「家族!? ボン太くんが家族なの!? す、凄いねキミ！ キミの家族どうなってるの!?!」

「どうなってるって……ただの七人家族だよ。はやてにあたしにボン太くん、シグナムにシャマルにザフィーラ……あ、後閨の書もいるぜ」
「や、閨の書？ それって本当に七人家族なの？」

「だから家族だって言ってんじゃねーか。それで、結局神社って何なんだよ？」

「ふもつふう！」

「ほら、ボン太くんだって『早く教えて！』って言ってるぜ？」

「ボン太くんの言葉分かるの!?! く、くう……どうして今日に限ってカナちゃんより先に帰っちゃったんだろう……。こんな出来事と遭遇するんだったらカナちゃんと一緒に帰るんだったよ……」

ヴィータたちには理解出来ない単語を交えて、眼鏡の少女はブツブツ呟き始めた。

そんな眼鏡の少女にヴィータは『カナちゃんって誰だ?』と軽く疑問を覚えるが、別にいいか。と結論づけて、眼鏡の少女に先を促そうとする。

「なーなー、だから神社って何？」

「……あ、ああ、ごめんね！ えっとね、神社って言うのはね？ うーん……神さまがいる場所？ かな？ お願い事を叶えてくれるんだよー！」

「神……だと……？」

「ふもつふ……う？」

訳……お願い事、だと……？」

凸凹コンビの次の蹂躞地（行き先）が決定したようです。

ボン太くん、初無双する

「……この上だな」

「ふもっふ……」

神社の場所を聞く為に呼び止めた眼鏡の女、常盤恭子（名前教えてくれた、というか教えてきた）——恭子から教えてもらった神社の場所に到着すると、長い階段があった。家の階段なんか比較にならない程の長い階段だ。

恭子の話によるとこの階段を登り切った先に神社があるらしい。……だけど、神社の場所を教えてくださいただけで良かったのに、どうして恭子の奴は名前だけじゃなくてえつと……電話番号？　つてやつも教えてきたんだ？ 『また会おうね！　今度はカナちゃんも一緒に！』とか言ってたし。だからカナちゃんって誰なんだよ。

「よしっ！　行こうぜ、ボン太くん！」

「ふもっふう！」

まあ、分からないことを何時までも考えていても時間の無駄だ。早速ボン太くんと一緒に足を踏み出し、階段を登り始める。

「ん？」

階段を登ろうと階段に足をかけた瞬間、上の方から大きな魔力を感じ顔を上げる。結構大きな魔力だな……いや、あたしの周りの奴ら（正確には三人）がへっぽこだから大きく感じたってのもあるかもしれないけど。ううん、でもこれは……やっぱりそうだ！

「この魔力は、恭子が言ってた神社の神って奴の魔力だな!？」

絶対そうに違いない！　成る程、これぐらいの魔力があれば神って呼ばれるようになるのか……って、それだったらあたしも神？　というかギガ神レベルにまで達してるんじゃない？

「ふもっふう！」

「へ?..」

“あたしは神だった説”について考えていたら、ボン太くんが頭を横に振って『違うよ』と言って来た。あたしは神だった説の何が違うってんだ？

「ふも、ふもふも！」

『本物の神様は、ひよろひよろの気弱そうなサラリーマンだったよ！』？ いや、そんなのが神様なわけ……って、ボン太くん神様知ってんの!？」

「ふもつふもつふ、ふもつふも」

『気弱だけど優しい人だったよ。サラリーマンみたいだったけど』とボン太くんは言う。

か、神様ってサラリーマンだったのか、知らなかったぜ……あれ、結局ボン太くんがなんで神様知ってるのか分かってない。

「な、なあボン太くん。なんでボン太くんは神様がいるって知ってるんだ？」

「ふも、ふもふも。ふもふもつふう！」

『企業秘密らしいよ！ それより早く上に行こう!』？ き、企業秘密？ ……って、待てよボン太くん!」

階段を三段跳びで飛び跳ねるボン太くんを必死に追う。

な、なんであの脚であんなこと出来るんだよ！ ボン太くんって本当になんなんだよ!？」

「おい、ボン太くん！ ちょっと待って……ん？」

「ふもお……？」

ボン太くんは階段を登り切ったところにあつた赤い門の下みたいな物の前で立ち止まっていた。そのままボン太くんの視線の先を見ると、白い服を着たツインテールの、両手で金色の杖を持った女の姿。その女の目の前には、犬みただけど犬とは比べ物にならない大きさの黒いバケモノがいる。

……ま、まさかあれが……!」

「あれが、神社の神か!」

「ふええ!?! ゆ、ユーノくん！ 人がい……ボン太くん!?!」

「ふも、ふもつふもつふ!」

「え、いつの間に……いや、あれ人なの!?!」

「ち、違くないだろ！ あの犬(？)、どこことなく神様オーラ出してんじゃない！ 大体神様がサラリーマンってのは絶対無い!」

「ほ、ボン太くんはふもふもランドのそこそこ人気のマスコットキャラクターで……そ、そうじゃなくて! どうするのっ?」

「……ふも。ふもふもふも」

「ど、どうするって言ったって……」

「え? 『……分かった。あの犬が神様じゃないこと証明する』って?」

あ、待てよボン太くん!」

「どうかさつきからふもふもうるさいなお!」

白い服の女が叫ぶと同時に、ボン太くんはふもふも足音を立てながら黒いバケモノに向かって駆け出した。

一瞬遅れ、ボン太くんの接近に気付いた黒いバケモノが足の爪を振るいボン太くんを迎撃しようとするが、ボン太くんはそれよりも速く

「ふうもつふう〜!」

「ギャウン!」

「ええ〜〜!」

黒いバケモノの顎にアッパーカットを放ち、黒いバケモノを上へと吹き飛ばした。

白い服の女と女の足元にいた細長い何か(多分動物だと思う)が驚きの声を上げるが、ボン太くんは気にせず、空中から落ちてくる黒いバケモノに追撃を開始する。

「ふもふもふもふもふもふもふもお……ふもつふう〜!」

「グ、ル、チヨ、ヤメ……ガア!」

「す、すげえ……!」

「……………」

ボン太くんはまるでガトリングガンのように拳を連続で放ち、黒いバケモノを無理矢理空中に留まらせ、ダメージを蓄積させていく。と言っても、パンチの一発一発がアイゼンのラケーテンハンマー並の……いや、それ以上の威力があるかもしれない。黒いバケモノはもうとつくのとうに瀕死状態だ。ちなみに、白い服の女と細長い何かは何故か呆然としていた。

「ふもお!」

あたしたちが見ている間もボン太くんのパンチの連打は続いていたが、ボン太くんは突然連打を止めて、大きく振りかぶった右腕を黒いバケモノの腹へとブチ込み、黒いバケモノを更に空高く打ち上げた。

「ふ、もっふうー！」

「あ、あれは?！」

ボン太くんは空高く跳び上がり、太陽を背に何やらカツコイイのかそうじゃないのか分からないポーズをとった後、右脚を突き出し、勢いよく落下していく。

ボン太くんが落下する先にいるのは……空高く打ち上げられた黒いバケモノ。

「ふもっふうー！ ふもっふふもふもっふうー！」

「ギャアアアアア!?!」

ボン太くんのキックが黒いバケモノを貫き、灰へと変える。

地上に降り立ったボン太くんはズザザアア……と地面を滑り、『ふもお……』と満足気な息(?)を吐いた。……い、今のは!

『究極う！ ボン太くんキック!』だって!?!」

「何それ!?!」

「いや、知らねーけど」

「知らないの!?!」

知ってるわけないじゃん、当たり前だろ。何言ってるんだ、この二人(?)。

「ふもっふ……」

「ハッ、ボン太くん……」

「ふもっふふもっふ」

『私の言ってたこと、信じてくれる?』……ぼ、ボン太くん!

「ボン太くん! あたしが悪かったあ! ごめんなあ!」

「ふもっふ……ふもっふ!」

「うう……ありがとうボン太『パキッ』ん?」

ボン太くんに抱きつこうとしたら、足下から小さな何かが割れたよな音がした。

何だろうと思い、足をどかしてみると、

「……青い種みたいなのが割れてるんだけど……何だ？ コレ」

「ふもっふもっふ！」

『正に種割れだね！』？ あはは、上手いこと言っ——」

「ジュエルシードがああああ!?!」

「うわあ（ふもっふう）!?!」

あたしとボン太くんがほがらかに談笑していると、白い服の女と細長い何かが突然泡を食ったように絶叫した。

……………ジュエルSEEDって、なんだ？

ボン太くん、友達が増える

「——というわけなんだよ、はやて」

「ふもっふ」

散歩から帰ってきたヴィータとボン太くんが、散歩の途中であった出来事について説明……。

「してへんしてへん。『——というわけ』使って説明したことにしちや駄目やつて。ちゃんとそこの……二人？ の説明しい」

ヴィータとボン太くんの後ろにいる二人(?)を指差す。その先には、栗色の髪をツインテールにした私と同じぐらいの歳の女の子に、喋るフェレット。

……うん。おかしいのは分かつとる。フェレットが喋るなんて明らかにおかしいとは思う。けど、私にはもう分からないんよ。『何がおいしい』のか、さっぱり分からへんねん……。

「えー、面倒なんだけど……」

「ふもっふ……」

「我が儘言わへんの！」

ぶーたれる二人(?)を一喝。私が少しシリアス風にしたと思つたらこれや！ 大体私の感覚が麻痺してる原因は一にボン太くん、二にボン太くん、三にロリケンリッター……間違えた、ヴォルケンリッターなんやで？ 少しは反省しい！ ……いや、今となつてはみんなが傍にいない光景が想像出来へんけども！

「はやてちゃんはツンデレね！ 本来だつたらシグナムの領分な気がするけどね、ツンデレは」

「ツン……デレ？ 何だそれは。強いのか？」

「ふもっふ……ふもふもふも……」

『ツンデレ……それは至高、それは神秘、人が生み出した最大最強の技だ……』って言ってる」

「なん、だと……？ それを使いこなせることが出来れば、今の忌々しい小さき身体のひ弱な力から解放されるか……？ こうしてはいられん！ 行くぞシヤマル！ 特訓だあ！」

「ええ、シグナム！　まずは『あんだなんか』からのフレーズを練習よー」

「……ふもつふも」

『……つて、クライドが言ってた』……クライドつて、誰？」

「一旦黙りい！　シヤマルがどうしてその単語知ってるかだとかクライドつて誰とか色々ツツコミどころあるけども、私のツツコミが間に合わんし、二人……げふんげふん、一人と一匹が呆然としてるやろー」
「僕は人だよ!?　どうして訂正したの!?!」

たまには私もボケたかつたんや……というか人なんやね、このフレット。てつきり私は魔法少女モノとかで必ず出てくる謎の生物系の何かかと思つてたわ。

「まあ、ヴィータとボン太くん聞くよりそちらさんに聞いた方が早いわな。そこな女の子に……フレットみたいな何か。説明してくれへん？　何があつたか」

「あ、はいなの」

「僕は一体どんな生物として認識されてるの!?!」

……あ、ボケれる。なんか嬉しい。

|||||

|||||

「——というわけなんです」

フレットみたいな何か、もといユーノくんが説明を終えた。凄いなあ……ユーノくんが『——というわけ』使つても、全然手抜きしたと思えへん。細かく説明したと錯覚するぐらいや。……いや、実際にたんやけど。

「えーつと。纏めると、ユーノくんはジュエルSEEDつちゅー危ないもんを拾いに来た」

いやー、魔法つてそない危ない物もあるんやなあ。願いを叶える宝石やったはずなのに、次元震やらなんやらを起こすんやつて。本末転倒つちゅーやつかなあ？

「正しくはジュエルシードですけど……はい、それで合ってます」
「ふむ。で、それを集めている最中に怪我をして、なのはちゃんに拾われ……あれ、なのはちゃんおらへん」

さつきまで近くにおったはずなのに……一体どこに「あ、ああ！
それじゃ駄目なの！」ん？

「その配置じゃ宇宙怪獣が包围を突破しちゃうの！　ここはイデオンを突っ込ませて、イデオのパワーを上げて……！」

「ふもっふもふも！」

「『駄目だよ！　せつかくイデオガン禁止でここまでやってきたのに、今更その制限を破るなんて！』って言ってるぞ。あたしもボン太くんに賛成だ。ここは勇氣の力でMAP兵器を使うしかねーだろ」

「駄目だよ！　変なこだわりは捨てないと駄目！　戦いは火力、それに尽きるの！」

「……なあ。ここはダイゼンガーで——」

「あれはボス専用！　多数との戦いにはこれでもかってほど向いてないです！　シグナムさんは黙っててください！」

「なっ……だ、ダイゼンガーのどこが悪いと言うんだあ！」

「親分の思想を否定するわけではないけど、この場では役立たずなの！　とにかくイデオン、イデオンなの！」

「アホ！　ここはバンプレイオスのMAP兵器で……って、何しとんねん！」

思わずノリツッコミかましてもうたわ！　なんで私とユーノくんが真面目な話してる最中にみんなテレビの前に集まってスパロボやっとなねん!?　しかもα！

「とういかなのはちゃんはどうして自然に混ざってんの!?!」

「……勇氣は決して負けない、なの」

「答えになってへん！」

なんや、この子！　普通の子かと思ってたのにまさかのスパロボゲーマーかいな！　私の周りにはまともな人はいないんか！

「ふもっふ」

「『はやても同じようなものだよ?　失礼やな！　私はキョウスケー」

「筋や！」

「私、はやてちゃんとは仲良く出来そうだよ。ねえ、バスタービームって魔法で再現出来ると思う？」

「なのはちゃん地球滅ぼす気なん!?　せめてトロニウムバスターキャノンやろ！」

「それも大概だと思おうの」

「……ハッ、いつの間にかなのはちゃんのペースに引き込まれとった！　駄目や、駄目やで！　この場で唯一の常識人である私がしつかりせんと！　……ユーノくん？　ユーノくんはフレットつぽい何かやから除外で。」

「だから僕は人なんだけど……で、なのはに協力してもらってジュエルシードを集めてたんですが……そのボン太くんって人(?)がジュエルシード破壊しちゃって……」

「何やってんの、ボン太くん!?!」

「散歩中に随分とんでもないことしでかしたんやな!?!」

「ふ、ふもつふもふも！」

「『ち、違うよ！　壊れたのはヴィータが踏んだせいだよ!』だって!?!　いやいや、待てよ!　確かに踏んで壊したのはあたしだけど、壊れる寸前までダメージを蓄積させたのはボン太くんだろ!」

「いや、どっちもどっちやって!」

不毛な争いを始めるヴィータとボン太くん。

もう駄目や、この二人(?)……自由にも程があるわ。

「あー……ユーノくん。罪滅ぼしって言っちゃなんやけど、ボン太くんとヴィータ、好きに使ってええよ」

「え、でもそんな……」

「大丈夫やって。この二人相当強いからよっぽどのことがない限り「ストップ、はやてちゃん!」ん？　シヤマルどうしたん?」

何故かシヤマルが興奮した様子で突然叫んできた。な、なんや?　どないしたんや?」

「どうしたシヤマル?　突然大声を上げて」

「斬艦刀・雲曜の太刀……これは使えるかもしれんな」

不審に思ったザフィーラとシグ……は違った、ザフィーラがシャマルに尋ねる。ザフィーラの問いに対してシャマルは「気づいてないの!?!」と言い、

「ジュエルシールドは聞いた限りでは相当な魔力を秘めているロストロギアらしいじゃない?　そして私たちの身体が小さい理由は闇の書のプログラムが破損しているから……だけど、それは魔力さえあれば直るものなの」

「……まさかシャマル。ジュエルシールドの魔力を闇の書に渡せば、俺たちは……」

「ええ、元の姿に戻れるのよ!」

「我に断てぬモノな……元に戻れるだとお!?!」

何やらテンションが上がり始めている、ヴィータを除いたヴォルケンリッターの三人。

良く分からない展開に私とユーノくんは置いてけぼり、ボン太くんとヴィータは喧嘩中、なのはちゃんはスパロボ中……なんで人の家のゲーム勝手にやってるん?

「……よし、ユーノとか言ったな。私たちヴォルケンリッターもジュエルシールドを集めるのに協力しよう」

「え、あ、はい……って、ええ!?!　だ、駄目ですよ!　あなたたちの魔力じゃとてもジュエルシールドには——」

「ふっ、見くびるなよ……レヴァンティン!」

慌てて引き留めようとするユーノくんの制止も聞かず、シグナムは首に提げていたレヴァンティンを構え、

「我らヴォルケンリッター!　例えば目の前にどのような敵が現れようとも……って、重い……」

「……私たちは負けないわ!　元の姿に戻るまでは!」

「大船に乗ったつもりでいてくれ」

「……はやてさん……?」

ユーノくんが不安そうな目で私を見てきた!

……。

「……頑張つて!」

「ええええ!?!」

多分やけど、この時の私の笑顔はとても輝いていたと思います。

金髪少女、未知の生物に出会う

雲一つない青空。はやてとなのはがスパロボ友達になってから、シグナムたち——ヴィータ除く——ヴォル……ロリケンリッターが自分たちのため……げふんげふん、世のためユーノのため自分たちのためジュエルシードを集めると決めた日から数日。

彼女たちロリケンリッターはそれはそれは勇ましく……

「紫電——あうっ」

「シグナム!! くっ、よくもやってくれたわね! 木のツタでシグナムを転ばせるなんて!」

それはもう、勇ましく……。

「ておああああ……ぐああああ!」

「ザフィーラ!? くっ、やるわね! 木のツタでザフィーラを地面に顔から倒れさせるなんて!」

……それはもう、勇ましく……。

「二人の仇は私が……ああ!? くっ、ここまで木のツタを自由自在に操るなんて……流星はジュエルペットってところね!」

「お前ら転んでるだけじゃねーか。てかジュエルSEEDだから」

「いや、ジュエルシードなんですけど……ジュエルペットってなんですか?」

それはもう勇ましく……転んでいた。

地面に俯せに倒れて土の味を思う存分堪能しているロリ二名にシヨタ一名。これが大人の状態で倒れていたとしたら激しい激闘の末に敗れたと解釈出来るかもしれないが、悲しいかな、今の彼女たちはロリシヨタ。転んでいる姿も微笑ましいだけである。というか彼女たち、ジュエルSEEDの暴走体に適当にあしらわれただけである。

不甲斐ない仲間たちを見て、紅いゴスロリ服と言う名のバリアジャケツト（はやて様考案）を着ているヴィータは大きな溜息を吐いて、「馬鹿だろお前ら。魔力が全然ない今のお前らじゃ、こうなることは明らかじゃねーか。あたしとボン太くん、なのはに任せとけばいいん

Dで、あたしたちがジュエルSEED集めに参加してから三個目のジュエルSEEDだ。その全部の収集にこいつらは参加してるんだけど……。

「ふもっふもふも」

『何故か毎回転んでばっかりだもんね』とボン太くんは言う。

そう、こいつらは毎回毎回何かしらで転ぶ。ジュエルSEEDに邪魔されて転んだり、石に躓いて転んだり、何も無いところで転んだり、石に躓いて転んだり……ジュエルSEEDに関係ないことで転ぶ方が多い。その度にあたしがフォローに回らなきゃいけないんだから、面倒なことこの上ない。まあ、ジュエルSEEDはボン太くんとなのは——本当に魔法知ったばかりかって疑うぐらい強い——が楽勝でどうにかしちやうから、あたしもいらないんだけどな。

「……気にしてくれるな、ヴィータ。自身のあまりの不甲斐なさに、失望しているだけだ」

「まあ、レヴァンティンもまともに振れないんじゃないか」

「……どうせ私なんて、私なんて……」

レヴァンティンで地面に『の』を書き始めた。こんな街中でレヴァンティン出すんじゃないか。

「仕方ないわよ。今のシグナムじゃレヴァンティンは重すぎるわ」

「ふもっふもっふるふもふも」

『指に填まらないからってクラールヴィントの間にティッシュを入れて無理矢理填める人も大概だよ』って言ってるぞ」

「……私なんて、私なんて……」

シヤマルも『の』を書き始めた。おいおい、ボン太くんやめてくれよ。こいつらどうにかするの面倒なんだから。

「つたく……ん？ ザファイラ、何見てんだ？」

「いや、あれは何だと思ってな」

「あれ／ふも？」

ボン太くんと一緒にザファイラが見ている先を見る。なんだか、道路の方が騒がしいみたいだけど……、

「ちよつと！ 何すんのよ！」

「大人しくしな嬢ちゃん！ 大人しくしてりや何もしねえよ！ おい、出せ！」

「へい！ 兄貴！」

「離しなさいよー！」

「あら。お一人様追加ですか？」

何故か異様にもみ上げが長い奴らが、はやてと同じぐらいの背の金髪の女を車に押し込んでいた。……あ、車発車した。

……………うーん。

「なあザフィーラ。何あれ？」

「それは俺が聞きたい。——何故奴らは、あんなにもみ上げが長かったんだ…………？」

「そこかよ。ツツコむところそこかよ」

こいつも小さくなってから変わったな、色々。

そんなことを思っていると、周りがざわつき始めた。『誘拐か？』とか『ヤバくないか？』とか『ハア、ハア…………お蓮さんどこ行ったのよー！』とか…………一気に騒がしくなってきたな。

「そんなに騒ぐんなら誘拐される前にどうにかしようぜ。なあボン太くん……………つて、あれ？」

さつきまで隣にいたはずのボン太くんは、いつの間にかいなくなっていた。

|||||

|||||

「あー、もう！ この縄さつきと外しなさいよ！」

どっかの廃ビルの中の柱に、私は縄で縛られていた。

もうっ！ どうしてただ歩いてただけなのにこんなことになるのよ！

「まあ、大人しくしてな嬢ちゃん。お前さんのパパが金を持ってくるまでの辛抱さ」

何故か異様にもみ上げの長い男が言う。私の家のお金目当てなの

……？　じゃあこの人も？

私は隣を見る。そこには私と同じように柱に縛りつけられた、黒髪のとつても綺麗な女の人がいた。

女の人はもみ上げの男の言葉を聞いて、ニコリと笑い、

「お金が無いのですか。それは大変でしょうねえ、もみ上げさん」

「いやあ、全くだ。調子に乗ったのがいけなかったのかねえ、ヴェノムを一機盛大に壊しちまってよお、クビだよクビ。だが、たまたま辿り着いた日本でバニングスの娘に会えるとはラッキーだった！　お前さんも美樹原って言う有名な家の娘なんだろう？　今日の俺はツいてる……もみ上げのおかげかな」

そう言ってもみ上げを弄り始めるもみ上げの男。

私たちはお金と交換するための人質ってわけね……。というかどうしてこの……美樹原って人はこんなに余裕なの？　こんな状況なのに笑えるってどういうこと？

「……あの」

「はい？　なんですか？　あ、私は美樹原蓮と言います」

「あ、私はアリサ・バニングスです……って、そうじゃなくて。どうしてそんなに落ち着いていられるんですか？」

一応私たちは誘拐されて、身代金のための人質にされてるんだけど。

私の質問の意味を察したのか察してないのか分からないけど、美樹原さんは「そういうことなら」と言い、

「何事も落ち着きが大事なんです。確か……そう、明鏡止水というやつです。相良さんによく似た声の方が出てくるアニメで言ってます」

「ごつどふいんがー、でしたっけ？　と笑い返してくる美樹原さん。

知らないわよ！　私には分からないわよ、そのアニメもあなたという人も！　あああ、言ってることは意味不明だけど無駄に輝いてる美樹原さんは一体何なの!?　なんだか無性に崇めたくなってる自分がいる！

「……もういいです。直に警察が来るだろうし——」

「ぐあっ!？」

「はっ。」

突然苦悶の声が聞こえたと思ったら、もみ上げの男よりもみ上げが短い男……ややこしい、もみ上げ下っ端1がビルの入口の方から吹っ飛んできた。

「な、なんだ!? 何が起きたんだ!？」

さっきからずっともみ上げを弄っていたもみ上げリーダーを守るように、もみ上げ下っ端2と10がわらわらと集まってくる。率直に言って、キモい。

「……あら、可愛い」

「美樹原さん!? 気でも狂ったんですか!? もみ上げが可愛いだなんて!」

「いえ、確かにもみ上げもユニークですが……ほら、あそこ」

「あそこって……にや?」

美樹原さんが見ている先を見て、私は思わず呆けた声を漏らしてしまった。

だって、それは仕方が無いと思う。私には、この現実離れと称していいのかどうかすら分からない光景を前に、どのような反応をするのが正常なのか分からなかったから。

だって、そこには、

「ふもっふー! ふもふもおー!」

「ふもふも……ふもっふ」

そこそこ人気な遊園地のふもふもランドの、そこそこ人気なマスコットであるボン太くんと、何故か手に機関銃を持った真っ黒なボン太くんがいたからだ。

……いや、何あれ?

アリサ、ときめきメモリーズ

えーっと、まずは情報を整理しよう。

私は、何故かもみ上げが長い集団に連れ去られて、どこかの廃ビルの柱に縄で縛られている。俗に言う人質というやつだ。私の家……バニングス家の財産を狙っているんだと思う。

「あれは……確かボン太くん、でしたか？ 実際に見てみると随分と愛らしいですね」

私と同じように柱に縛られながらも、のほほんとした雰囲気を出している黒髪の和風美人、美樹原蓮さん。恐らくだけこの人も人質として捕まっているんだろう。本人気付いて無さそうだけど。これっぽっちも気付いて無さそうだけど。

「あ、兄貴！ ありやあなんなんですかい！ 犬っすか？ 熊っすか！？」

「バアアアツキヤロウ！ ネズミに決まってるだろうが！」

「ネズミって、あのハハツ☆ とか笑う方の——」

「バアアアアツキヤロオオオオウ！ それ以上言うな、死にたいのかあ！ 奴らはアマルガムにも匹敵する戦力を持つてえ噂だぞお!? 今の俺たちなんか一捻りされちまう！ 分かったなら今は奴らに関する一言も喋るんじやねえぞ！」

——ま、俺のもみ上げが長い内は俺たちは安泰さあああ！」

「「さっすが兄貴い！」」

手に『安心安全アマルガム製 ※取扱い注意byミス・A g』とデカデカと書かれている銃らしき物を持ったもみ上げの長い男たちが、その中でも一段ともみ上げの長い兄貴って男を褒め称えている。

あの男たちが私と美樹原さんを誘拐した実行犯のようだ。とかそれ以外考えられない。あのリーダーっぽい兄貴って奴、物凄く悪そうな顔してるもの。誰かを人質にとったのに、ゴミ係兼傘係の人にド派手にやられそうな顔してるもの。

「ふもっふふもっ？」

「ふもっふー！」

もみ上げが長い男たちの正面では、通常カラー（防弾ジャケットみたいな着てるけど）のボン太くんの『準備はいい?』という言葉に、黒のボン太くんは両手で持った機関銃を掲げて『当然!』と自慢気に答えていた。……って、どうして私、ボン太くんの言ってることが分かるようになってるの!?

「私、どこかおかしくなってるんじゃない?…なんかボン太くん見ると胸がドキドキするし、熱でもあるんでしょうね、うん」

「あらあら、アリサさん。熱があるのですか? でしたら横になった方が良いですよ? 私の膝で良ければ、いくらでも枕にしてください」

「さあ、どうぞ。と膝を手でポンポンと叩いて膝枕をアピールする美樹原さん。いや、柱に縛られてる状態で膝枕も何も——?」

「どうして縄外れてるの!?! 私のも外れてるし!」
いつの間にか縄が外れてた! 一体どういうことなの? 大分キツく縛られてたから、私たちの力じゃどうにも出来そうになかったのに!

私の疑問の感情を察したのか、美樹原さんは「それはですね」と言っただ後、私を……いや、私の後ろを指差し、

「そこのお方が外してくれました」
「ふもつふ?」

美樹原さんが指差す先には、私の肩に平ったい手を置いて『大丈夫?』と問い掛けてくることなく猫……いや、山猫っぽいボン太くんがいた。

……………。
……あー、えーつと……………こほん。

「増えたああああああつ!」

||||||

||||||

一方その頃、ボン太くんズともみ上げ団は、未だに睨み合いを続け

ていた。端から見ても上から見てもどこから見ても怪しい光景だ。最早シールドを通り越した何かだ。

「増えたああああああつ!!」

「うおっ!? 一体どうし……あ、兄貴! 嬢ちゃんたちの縄が外れて……というかネズミが増えています!」

「んだとお!」

だが、その睨み合いのようでもみ上げのようだがしかしふもつふな均衡は、アリサの叫び声によって破られた。

もみ上げ団の注意がアリサたちがいる方向に向いた瞬間、ボン太くん、sが好機とばかりに動き出す。

「ふもつふ!」

訳：今だよ!

「ふもつふ! ふもふもお!」

訳：任せろ! ブレイズキャノン!

通常カラー……というかいつものボン太くんの合図で、黒ボン太くんが手に持つ機関銃から弾丸ではなく水色の魔力砲撃を放った。

放たれた砲撃はもみ上げ団に向かって直進し、

「ギャ——!?!」

「子分どもお! チィ……野郎ども、撃てええええい!」

もみ上げ団の一部を吹き飛ばした。髪がアフロになるだけで済んでいるのはギャグ（ふもつふ）補正だろう、きつとそうだろう。

愛するもみ上げ子分たちが吹っ飛ばされたことに一瞬もみ上げリーダーは驚くが、すぐさま残ったもみ上げ子分たちに命令を下す。親愛なるもみ上げリーダーの命を受けたもみ上げ子分たちは手に持っていた銃の銃口を黒ボン太くんに向け、引き金を引いた。

「ふもつふもつふる!」

訳：させないよ!

「な、なあにいい! 弾丸が潰されたかどうか?」

しかし、放たれた弾丸は、黒ボン太くんを庇うように前に出たボン

太くんに当たる直前に、壁にぶつかつたかのように止まり、見えない何かに押し潰された。

もみ上げリーダーは目の前で起きた現象に驚愕した。何故ならば、今日の前で起きた現象は、彼がよく知っている装置によって実現される現象だったからだ。

「馬鹿な！ ラムダ・ドライバだとうう!? あ、有り得ん！ 有り得んぞおおお！ ミスリルのラムダ・ドライバは……って、俺は何を言っているんだ？」

驚愕のあまり、あるかもしれない未来に断末魔として言うのである台詞を口走ってしまったのも、仕方ないと言えるだろう。うん、仕方ない。

「ふもっふふも！」

訳：ふもっふフロントム！

「もっふるふもっふるうー！」

訳：ステインガーブレイド・ガトリングシフトオ！

「二」「ぐっはああああああ!」「二」

「ハッ!? 子分ども！」

もみ上げリーダーが思考を繰り広げている間に、二人(?)のボン太くんがもみ上げ子分たちを蹂躪していた。ボン太くんは最早幻影とも見て取れるほどの拳の連打で、黒ボン太くんは最早正体隠す気ないよね? と思わずツッコんでしまいそうな感じで、機関銃ならではの魔法(だと思いたい)を繰り出している。正に地獄絵図……間違えた、正にふもっふ絵図。

迫りくるふもっふの脅威にもみ上げリーダーは苦々しい表情を作り、

「子分ども！ 逃げるぞお！」

「ええっ!? で、ですけど、逃げ切れるんでっ？」

「バツキャロオオウ！ 今日の俺はもみ上げが普段より1mm長いんだ！ 絶対逃げ切れる！ ——俺を信じろ、子分ども！」

「二あ、兄貴い！ 一生ついていきま——」

「ふもっふふもふもおくくくく！」

「ふもっふふもお〜」

「ふもっふ〜!」

「ふもふも〜!」

「——おっ、ボン太くんいた……って、うお!?　なんか今ボン太くん以外にボン太くんいなかった?」

「ふもっふもっふるふも」

『天国からの助っ人、もとい派遣社員だよ』?　……助っ人もボン太くんなのか!　スゲー、天国!　ギガスゲー!」

「いや待て、ヴィータ。ツツコムところが違うだろう。ボン太くん、急になくなった理由はなんだ?」

「ふもっふふも」

『なんかあのもみ上げムカついたから』だってさ」

「……まあ、確かに私もあのもみ上げを見た瞬間、言い表しようのないイラつきを感じたが……」

「ちよつと待ちなさいシグナム。私は今去って行ったボン太くんたちがとてつもなく気にな——」

「あ、ねえその子たち!　ここら辺で綺麗な黒髪の女の子、見なかった!」

「誰がチビで小さいガキだ(なのよ)!」

「言ってないわよ!」

「……俺には何が起きたかサツパリ分からん」

サビーナ、海鳴視察任務 いちっ！

私の名前はサビーナ・レフニオ。アマルガムの構成員です。

……え？ アマルガムってなんだって？ 現代人なんだから文明の力を使いなさい。そんなもの、ググれば出てきますよ、ググれば。「いや、サビーナ。ググったぐらいでアマルガムの情報が出てきたら大変なんだけど」

「……ハア。レナード様はおめでたい頭をしておられますね」

「おかしいな、キミはそんなキャラだったかな」

「あの情報検索システムを嘗めない方がよろしいかと。彼らの情報網は異常です。私も何度かお世話になりました」

「無視かい。……お世話って、何に？」

「攻略サイトに決まっているでしょう。まさかステラを助け出す方法があるとは思いませんでした。まったく、私もまだまだ未熟ですね。シンくんを悲しませる結果にならなくて良かったです」

「うん、知らない間にキミは変わってしまったんだね。まさか初登場でこの僕がツツコミに回されるとは思ってたよ……ハア」

そう言って大きな溜息を吐くこのお方は、アマルガムの幹部ミス・Agことレナード・テストロッサ。私はレナード様とお呼びしている。まあ、上司なわけだから仕方が無い。ハア。

「……どうして、キミは、今、溜息を吐いたのかな？」

「それで？ 私を呼んだ理由はなんですか？」

「無視かい」

……ふう。やはりレナード様はお疲れのようだ。私が発する言葉全てに噛みついてくる、これでは話がまったく進まない。

これはやはり、あれでしょうか、私を女として求めている、ということなのでしょうね。ふっ、それでは仕方ありません。

「さあ、どうぞレナード様。この私を思う存分貪ってください」

「やっぱりキミはおかしい！ 今回が初登場だというのに何があったんだ！ それと描写出来ない格好をするんじゃない！ 色々と面倒なことになるから！」

レナード様がお怒りなので、着崩していた……というかそこらへんに放っていた服を着直す。まさか欲情よりもツツコミを優先するとは……流石はレナード様。私が惚れた男です、ポツ。

「……どうしてキミが頬に手を当てて顔を赤くしているのかは知らないけど……うん。任務だよサビーナ。日本の海鳴市つてところの視察任務だ」

「視察任務、ですか？ 何故私か？」

私も確かに実行部隊という役柄ですが、視察任務ならば私以外の誰でも良さそうなものですが……そういえば海鳴と言えば、千鳥かなめ……ウイスパードがいる街で——

「最近になって『魔法』が確認された街、でしたか？」

「ああ、そうだよ。どうもジュエルシードつていう「ジュエルSEED」……ロストロギアが街中にばら撒かれたらしいんだ。おそらく近いうちにこれを察知した管理局が来る。もし管理局に彼女がウイスパードだということがバレたら——」

「え、ググつたら普通に出るんですからもうとつくに知られてると思うんですけど………すいません嘘です」

レナード様が憤りとか虚しさとかその他諸々が混じり合った複雑な目で見えてきたので、慌てて訂正する。いけないいけない、調子に乗ってからかいすぎるとこうなるから気をつけなければ。

「では私の任務は千鳥かなめを早急に連れ去ることでですか？ ですが、視察任務と言うのは……」

「いいや、文字通り視察任務さ。まだ管理局には彼女がウイスパードだということはバレていないだろうしね。ただやはり……信頼のおける部下を一人は彼女の傍に置いておきたい」

「それはつまり私にこの場で脱げと「違う」………意気地なし」

少し俯いて、顔を赤くしながらボソツと呟いてみたり。

「……………」

……ふっ。レナード様はどうやらツンデレなようです。今はデレになりかけているツン、と言ったところででしょうか。ぷるぷると震わせた拳を振り下ろすか振り下ろすまいか迷っている姿こそその証拠。

ふふふ、照れ屋さんですねレナード様は。

「……耐えろ、今は耐えるんだレナード・テストロッサ……！」

——あー、とにかく。千鳥かなめを監視してほしい。そして、管理局が彼女に危害を加えようとした場合は……分かってるね？」

「ええ、分かっています。このAS（アームスレイブ）デバイス『ヴェノム』を使えばよろしいんですね？」

私は懐からアルファベットのIを模した形のペンダントを取り出す。

ASデバイスと言うのは、基本的には魔導師が使うデバイスと変わらない。ただ、ASをそのままバリアジャケットにした感じだ。武装はASが使うような武装を全て魔力で補うようにしたものです……このデバイスの真価は、ASに乗らずに生身でラムダ・ドライバが使えるということ。魔導師が使うようなデバイスとはレベルが違います。

まあ、製造に無駄にコストがかかるので、現状でこのデバイスを持っているのはレナード様にミスタ・F e、ファウラーに私、それと……名前を忘れてしまいました。確か……もみ上げでしたかね？まさかテストでASデバイスをぶっ壊すとは思いませんでしたか。

……あ、ちよつとそこ。この小説にそんな設定いらねーだろ、とか言わないでください。後々重要になってくるはずですから。多分、きつと、恐らく。

「そう、それだ。ラムダ・ドライバを使いこなささえすれば、管理局のEースとも対等に渡り合えるはずだよ。

………とここで、どうして待機形態をI字型にしろ——なんて言ってきたんだい？ 別に大した手間じゃなかったけど、『私専用、とかみたいじゃないですか』みたいな答えだったらはっ倒すよ」

後半のツンは華麗にスルーして、レナード様の疑問に私はASデバイス『ヴェノム』を首に提げた後、微笑を浮かべ答える。

「シンクんの機体、インパルスですよ。レナード様」

「ああ、だからIか………というかドヤ顔止めろ。はっ倒すぞ」

「ふむ。このままではレナード様がご乱心なされそうなので、私はさっさと任務に行かせてもらいます。では！」

「あ、待つんだサビーナ！ はっ倒す前に言っておかなきゃいけないことが……！」

背後から聞こえるレナード様の制止の声を無視し、私は走る。

ふっ、アレ的なお説教ならともかく、言葉のお説教を受けるつもりは全く、これっぽっちと言っているほどありませんよ！

「最近海鳴に異様に強い謎のぬいぐるみが——って、行っちゃったか。まあ、彼女なら多分大丈夫だろ……色々な意味で」

|||||

というわけで、やってきました日本の海鳴市。

ふむ、私はこれからしばらくこの街で過ごすのですか。見たところ悪い街ではなさそうなので良しとしましょうか。

「くおらあああ！ 待てやあああ！ 大人しく私の出世のためのポイントになれごらあああ！」

「せ、先輩！ 飛ばし過ぎですよ！ ここ商店街ですよ!?!」

「ふっ、そんなの知らんわ！ 私を！ 止められる奴なんて！ この世界にいなあああああ！」

「……う、うわあああああん！」

平和な街ですね。この街ほど平和という二文字が似合う街はありません。ふっ、ASで駆けた戦場はこうして考えると地獄以外の何物でもないですね……。ええ、シンくんがステラと長時間離されるとかもう苦痛と言うほかないです。

「でいー！ おらー！ おらあー！」

「ふもっ！ ふもっ！ ふもっふうー！」

「じよ、嬢ちゃんとかボン太くん……だよな？ そんな力入れてやったらゲームが壊れ——」

「ええい、まどろっこしいなあ！ アイゼン！ このモグラを叩き壊

せえ！」

『俺のドリルは！ 天を衝くドリルだあああ！』

「ふもつふもおおおお！」

「嫌あああああ！」

しかし、こんなにも平和で良いのでしょうか。これではまるで休暇を貰ったみたいではありませんか。

……ああ、しかし任務はちゃんとこなすんですから、少しぐらいならゆつくりしても構いませんよね。普段激務に追われる私のためのレナード様の気遣いです、素直に受け取りましょう、私偉い。

「さてそれではまずは当面の住居に………ん？ あれは………」

視界の端に多大な違和感を感じ、そちらに目を向ける。その先にあったのは、ゲーム屋。いや、正確にはゲーム屋の前に陳列されたゲーム。

多種多様のロボットたちが描かれた、一目見ただけで心躍るパツケージ。

あ、あれは、まさか………！

「だ、第二次スーパーロボット大戦Z―破界篇―………!?!」

ば、馬鹿な！ 今日はまだ発売日ではないはず………はっ、もしか、これが噂に聞く早売り………？ くっ、流星は日本のゲーム屋、やることが違いますね………！

「ふっ………ですが、これはまさに神の悪戯。どうやら残り一本のようですが………ありがたく頂いていきます」

私はゆつくりと第二次スーパーロボット大戦Zに手を伸ばす。ふふふ、こうして再びシンくんに出会えるなんて………こんなに嬉しいことは――

「あっ」

「えっ?」

あと少しで手が届くところで、私の手に小さな手が当たっていた。

視線を横にずらすとそこには、栗色の髪をツインテールにした小学生ぐらいの女の子……いや、待ちなさいサビーナ。彼女の目をよく見るんです！ 彼女の目は、あの目は………！

私がお女の子を睨みつけていると、女の子も私を睨みかえしてきた。チイツ、やはり私の推測は当たっていたようですね……！

「……お姉さん。あなた、もしかして——」

「……お嬢さん。あなた、もしかして——」

そして、私と女の子は同時に言葉を発する！

「リアルロボット厨ですね!？」

「スーパーロボット厨ね!？」

この子は……この子は、敵だ！

——この出会いが、私の唯一無二の親友となる少女——高町なのはとの、最初の出会いだった……。

サビーナ、海鳴視察任務 につ！

私の名はサビーナ・レフニオ。アマルガムの構成員です。

現在私はウイスパード——千鳥かなめの監視任務のために、日本の海鳴に来ているのですが……、

「……お姉さん。いくらリアル系が運動性が高いと言っても、雑魚敵の攻撃を一度でも喰らったら撃墜される可能性があるの。そんなリスクを背負うぐらいならスーパー系で——」

「……お嬢さん。それは違うわ。愛情を注ぎこめばリアル系は応えてくれる……。でもスーパー系はどう？　いくら彼らが装甲が高いと言っても、何回も敵の攻撃を喰らい続ければ終わりよ」

「そのために修理機能を備えた機体がいるんじゃないですか！」

「その修理機体が狙われないなんてことはないでしょう？　だったら私は、援護防御を備えたパイロットを隣に据えるわ。万が一彼が狙われたとしても、リアル系だから避けてくれるでしょうしね」

「リアル系で援護防御を備えたパイロットなんて……ハッ！　カツ、カツなんですネ!?　あなたたちリアルロボット厨はいつもそうやってカツを生贄にしてっ！」

「生贄とは随分な言い草ね。彼は自らの身体を盾にして仲間を護ってくれているのよ？　立派だと思わない？」

「同じことです！　カツはニュータイプ技能を持っていますが、所詮それはお情けレベル。カツ自身の能力値は、魔法を使えないユーノくんレベル！　そんな彼を前線に出すだなんて……鬼畜にも程があります！」

スーパーロボット厨なツインテールの少女と舌戦を繰り広げています。

第二次スーパーロボット大戦Zを買おうとした矢先に出会った少女。まさかこんなところでスーパーロボット厨に出会うなんて……いえ、こんなところだからこそでしょうね。恐るべしは日本、恐るべしは海鳴。来日初日にこんな強敵と出くわすだなんて、正直言って予想外でした。

……ですが、リアルロボット厨とスーパーロボット厨は戦い合う運命！ こうなったらとことんまで、互いに相手の信仰を打ち砕くまで戦うしかないんです！

「鬼畜？ 面白いことを言いますね。では一つ例を出しましょう、……ボスボロット。あなたは彼をどうしていますか？」

「どうしているって、貴重な補給要員として……」

「貴重な、ですか。修理費たった10の彼を一度たりとも囷として使ったことがない？」

「ッ！ それ……！」

分かり易く狼狽する少女。

ふっ、そうでしょうでしょう。ボスボロットを囷にしたことのないスパロボゲーマーなどいません。修理費10……彼ほど囷に徹した機体はいない！

「さあ、観念なさい。私は確かにカツを囷にしたことはあるけれど、そのカツにも援護防御要員を隣接させているわ。メガライダーって結構硬いし。」

だけれど察するに、あなたは恐らく、ボスボロットを単機で突撃させて時間を稼ぐなんて戦法を実践したことがあるのでしょうか？ それでスーパーロボット厨を名乗るなんて笑わせ……」

「——その何が悪いんですか？」

「……開き直りですか」

この少女にはガツカリです。新たに機体にキャラへの愛情を叫ぶでもなく、自らの罪を認めるとは。私に並ぶ何かを感じたのですが、期待はずれだったようですね。

しかし少女は、私の落胆を気にすることなく、

「そうです。何も悪いことは無い」

「……まだ言いますか。」

「いい加減にしてください。開き直りなどと、見苦しいだけです」

「……私は、ボスボロットを最優先でフル改造しています」

「なん、ですって……!?!」

少女の口から紡がれた衝撃の事実、私は思わず後ずさる。

詰めが甘かったですねお姉さん。ちよつと魔力漏らして演出として風を吹かせて、ちよつとかつこよく言ったからといって、明らかに嘘だと分かる発言を看破できないようではまだまだ。その程度の力量じゃあ、お兄ちゃんの御神流・エーテルちゃぶ台返しを見切ることにはできないの。

まあ、私もできないんだけど………つて、

「あ」

「ん？」

商品棚に陳列されている第二次Zに手を伸ばしたら、またしても別の人と手がぶつかった。

手が伸ばされている方を見ると、そこには赤髪をショートポニーにした高校生ぐらいの女の人がいた。

……まさか、まさかとは思うけれど……、

「あなたも、これを？」

『これ』というのは勿論第二次Zなの。

「あ、うん。そうだけど？」

さもありませんと言った様子で女の人は返す。

くつ、またしても敵！ だけど、今の私と戦って勝てるスパロボ厨なんているわけない！

「さあ、かかってきてください。あなたが何ロボット厨だとしても、今の私の前では——」

「何言ってるの？ おじさん！ 予約してた第二次Zおねがーい！」

「あいよ………つて、ナミちゃん早いなあ。学校終わったばっかじゃないの？」

「えへへ。我慢出来なかったから抜け出して来ちゃったわ」

「仕方ないなあ、ナミちゃんは」

………予約？

「はいよ、ナミちゃん。いやあしかし流石はスパロボだね。まだ午前中だったのにもう売り切れちゃったよ」

「へえ、そうなんだ。その最後のスパロボ買った人は運が良かったね」
「それがさ、その最後を買ってったお客さんつてのが、赤髪の小さな子

とボン太くんだったんだよ。ついさっきまでそのゲームセンターにいたんだけどね」

「ボン太くんって最近よくこの商店街に現れるってやつ？　へー、京子が言ってたのって本当だったのねえ」

予約？　予約以外の分が全滅？

「……で、おじさん。ここで四つん這いになって項垂れてる二人は一体……」

「……さあ？」

「……お姉さん」

「……何かしら、お嬢さん」

私とお姉さんは四つん這いになったまま互いの視線を合わせる。

——何故だろう、この時この瞬間。私とお姉さん、スーパーロボット厨とリアルロボット厨は……分かり合えた気がした。

「私の家で、スパロボしませんか？」

「……良いわね。是非」

こうして、私にとって唯一無二の親友が一人増えました。

この感動的な瞬間を、近くのスーパーから目撃していた車椅子少女の発言。

「アホや。アホが二人いる」

ボン太くん、謎の少女と出会う

「はあ〜……ドでかい家やなあ」

「でしょ？ 地下に巨大ロボットとかありそうだと私は前々から踏んでるんだけど」

「なのはちゃんつてもう手遅れなんやね」

小学三年生にして手遅れレベルにまでなっているのはちゃんに憐みの視線を向けた後、私は眼前にそびえたつ豪邸を見る。どつちかって言うのアレや、借金大量に背負った執事がいそうな感じの豪邸やな。無駄に不死身で無駄に女顔で女装すると無駄に可愛いって感じでロックオンと恋に落ちるんやけど悲愛に終わってまう感じの。……あかん、なんか電波受信してもうた。気をしっかりと持つんや、愛沢咲夜……………誰やそれ！

「そんなことより早く中入ろうぜ。地下にあるロボットなんてコンパチ以外にねーんだからな」

「ふも！ ふもふもっふー！」

『待って！ 地下の王道はマジンガーだよ！』？ おいおいボン太くん。あれは地下っつーよりプール下じゃねえかよ」

変な電波のせいでショボイノリツツコミを強制されてしまったことに落ち込んでいる私の視界のど真ん中で、既に手遅れな私の家族が少女にあるまじき——ボン太くんが少女かは知らんけど——会話を交わしながら眼前の豪邸に向かって歩いて行く。そりやもう堂々と。

「私たち招待された身なんやから、もう少し慎ましく——」

「そんな委縮してたら何も始まらないの。」

一緒に行くこうなの！ 君島あああああ！」

『私の将来の夢はシエルブリットです』

「ちよっ、眩しっ」

赤い宝石——確かレイジングハートやったか？——を上空へ向け投げるのはちゃん。すると投げられたレイジングハート（なんか変なこと言ってる）がなのはちゃんの叫びに呼応して光を放つ。

そして光が収まった先には、何故か落胆しているのはちゃんとレ

イジングハートがいた。いや、何がしたいん？

「く、くそう……一体何が足りないなの……！」

『おそろく速さかと。……私は、シエルブリットになれない』

何やってるか知らんけど、近所迷惑やで。

「急に……間違えた、前々からおかしいと思つてたけど、今日は一段とおかしいでなのはちゃん。誰や君島つて」

「サビーナさんにレイジングハートと一緒に完徹して見てたから余韻が……なの♪」

「さっきの台詞言つた後やと、可愛らしい仕草されてもなんかもう色々駄目や」

可愛らしい仕草——どんな仕草なのかは想像にお任せする——を披露したなのはちゃんに冷たい視線を向けてやる。どつちかかっていうとなのはちゃんは『夢を……夢を見ていました』の方なんやけど……また電波か。

あ、サビーナさんちゅーのは最近なのはちゃんの家に居候し始めた人らしい。なんか海鳴にしばらく定住するらしかつたんやけど、その間ずっとホテル暮らしらしくて、それだつたらとなのはちゃんが自分の家に居候させてスパロボ……げふんげふん、一緒に暮らそうと提案したらしい。そしてお父さんたちにそれを話したら即了承された。どうもなのはちゃんのお兄さんが一番喜んでいたらしい、『一緒に魔法剣エーテルちゃぶ台返ししようぜ！』とか物凄い良い笑顔浮かべてたつてなのはちゃんが言つてた。サビーナさんも『不束者ですが、よろしくお願いします。……シン×ステラは私の正義』ジャステイスつて言つて嬉しそうにしてたとも教えられた。

まあ、仲が良いのは良いことやと思う。決してツツコミするのが面倒になつたわけやあらへんよ？ 絶対、絶対や。

「——と。そんなことを考えているうちに豪邸の中に入っていたのである」

《……はやて？ どうしてそんな変な口調なの》

《久しぶりの出番やからな、何をどうすればいいか分からなくなつてるんよ。

しかしユーノくん、唐突に出てきたな》

《うん。正直言つて出るタイミングがここしかないと思つたから。

これからは僕もツツコミ手伝うよ》

私のメタ発言にもツツコめない辺り、ユーノくん大分必死みたいやな。でもなユーノくん、今の状態のユーノくんほど出しにくいものはないねん。念話でしか喋れへんってツツコミとして致命的やで？

……あかん、もう電波なんてレベルやない。何かエレクトリックウエーブ的なものを受信してるとしか思えへん。

《はやて。それはつまり電波だね》

キリツという擬音が出そうな顔をするユーノくん。ドヤ顔すなや、ウザいねん。

「アリサちゃん！ 私、速度が足りないらしいんだけど、どうすればいいの!？」

「知らないわよ、また徹夜でアニメ一気見したの？ ……つと、いらつしゃい。あなたがあのボン太くんの保護者の八神はやて？」

「あ、はい、そうです」

なのはちゃんの意味が分からん言動を適当に流し、私を見てくる金髪の子。なんやろ、この子とは仲良く出来そうな気がする。友達的な意味でもツツコミ的な意味でも。

……あ、今更やけど、私たちは数日前にボン太くんが助けたっていうアリサ・バニングスっていう子の家にお招きされた。自分を助けてくれたボン太くんとその家族にお礼が言いたいらしい。

しかし、ボン太くんは一体どんな状況のこの子を助けたんやろ？

それは聞かされなかったから少し気になるなあ。もし道端で転びそうになったのを助けたとかやったら、お礼なんて恐縮過ぎて――

「本当にありがとう。あの時ボン太くんが来てくれなかったら私は、私は………もみあげを凄く長くされるところだったわ」

「身体に大事はないですか?! もみあげは無事ですか?!」

自身のもみあげを愛おしそうに触るアリサちゃんに私は駆け寄る！

そんな、そんなつらいことが……よくやったでボン太くん！ キミ

は八神家の誇りや！……って、あれ？

「そういえばその【もみあげの救世主】ボン太くんはどこに？」

《はやて。その称号はどうかと思う。キリッ》

《うっさい、黙りい。ただツツコミしただけでそない自慢げにするんやない。ぬっ殺してやるか？》

速さが足りないだのもっと、もっと輝けえええ——とかレイジングハートと話しているのはちゃんの肩の上に乗っているユーノくんを恐喝して黙らせて、周囲を見回してみる。

が、ボン太くんの姿はどこにも見当たらない。ボン太くんと一緒にいたヴィータも同様。影一つ見当たらない。どこ行ったんや？

「ああ、そうそう。ボン太くんとヴィータって子はあなたたちが来るのを待つてる間暇だからって、庭にいる犬たちと遊びに行つたわよ。……それが一分前だったかしら」

私が疑問に思っていると、アリサちゃんが疑問を解消してくれた。

……つたく、あの二人は。少しは大人しく出来ないんやろか——

『だ、誰だてめえ！ 一体何者——』

『黙れ！ そして聞け！』

我が名はフェイト！ フェイト・テストアロツサ！ 我こそは——悪を断つ剣なり！』

『ふも、ふも……!?!』『なん、だと……!?!』

『……………ふっ、今のは決まったね』

……………。

なんか変なの聞こえた——!?!

←おまけ 『今日のヴォルケンス（良いタイトル募集中）』

私の名はシグナム。闇の書の守護騎士ヴォルケンリッターが将だ。今私は、家の近くの商店街に来ている。主はやてが友人の家に行くと言うので、今日の買い物で代わりに引き受けたのだ。普段世話になつている分、こういうところで恩返しをせねば……ただでさえ身体が小さいから、主はやてに余計な迷惑をかけてばかりだから。どんな些細なことでもやらなければ。

「あれ、シグナムちゃん。一人でどうしたの？」

「あ、かなめ殿。いえ、主はやての代わりに買い物です。これからスーパーに行こうかとしていたところですよ」

「へえー。相変わらず偉いねえ、シグナムちゃんは！」

スーパーに向かう途中に私の前に現れたのは、千鳥かなめ殿。

以前朝のランニングをしていたら、そこで出会ったお方だ。かなめ殿は陣代高校という学校で生徒会という組織の副会長を務めているらしい。どうやら副会長というのは生徒を指揮する立場らしいのだが……それゆえか、かなめ殿には何か大きなものを感じる。初めて会った時も、初対面の私に対して優しく接してくれたりなど……将来は大物になるだろう。

「そんなことはありません。主はやてに養ってもらっている身、この程度では今まで受けた恩の一欠片も返せていないでしょう」

そう、主はやては偉大なお方だ。役立たずな私たちを優しく受け入れてくれて、そればかりか衣食住も世話してくれるなど……私は一生あのお方についていこう。

「……そのはやてちゃんって、確か8歳とか言ってなかったけ……？
まあ、いいや。それじゃあ一緒に行きましょうよ。私もこれから買い物に行くところだったのよ」

「そうなのですか？ では一緒に」

「ええ、行きましょ行きましょ！ ……一人だと怖いしさ」

途端、明るかったかなめ殿の表情が暗くなる。

む？ 一体どうしたのだ？

「どうしたのですか、かなめ殿？ どこかお具合でも……？」

「ああ、違うのよ。最近しつこくまとわりついてくる奴がいてね？特に害はない……わけじゃないんだけど、四六時中まとわりつかれたら、流石にね……ハア」

憂鬱そうに溜息を吐くかなめ殿。

な、なんだと!? かなめ殿にそのような狼藉を働く者がいるというのか!? ゆ、許せん。許せんぞ！

「かなめ殿！ その不屈き者の名は？」

「え？ ああ、相良くん……相良宗介って言うんだけど……それを聞いてどうするの？ さっきのなら気にしないで、ただの愚痴だからさ。シグナムちゃんは私の買い物に付き合ってくれば嬉しいな」
「……………分かりました」

「うんうん！ かなめさんは素直な子が大好きよ！

さっ、行きましょ。特売セール終わっちゃうよ」

そうやって歩き出すかなめ殿。その背を追おうと足を踏み出そうとした瞬間——私は背後に顔を向けた。

「……」

そこにいたのは、黒髪をざんばら切りにした、左頬に十字傷があるへの字口の男。

身に着けているのはかなめ殿が通っている高校の男子の制服。だが、私には分かる。奴は戦士。それも、凄腕の戦士だ。いくつもの戦場を超えてきたのだろう……それほどの闘気が溢れ出ている。おそらく……いや確実に、今の私では相手にならないだろう。

だが、奴がかなめ殿が言っていた相良宗介というやつなのか？ あのような闘気を出す者が、何故かなめ殿にまとわりついたりなど……ハッ！

「……………」

私と相良宗介は見つめ合う。そして、私たちにはそれで充分だった。

……そうか。貴様はかなめ殿を護るために……ふっ、その程度のことを見抜けないまでに私は腑抜けていたのか。まだまだ未熟だな。

私は静かに親指を上げて頑張れ、と相良宗介に伝える。すると相良

宗介は身に纏う鬨気を一層濃くさせる。

ふっ、流石だな相良宗介。貴様なら、かなめ殿を護り切ることが出来るだろう。

「お前の力……信じるぞ相良宗介」

「何してるのシグナムちゃん？ 早く！」

「あ、はい、すみません！ 今行きます！」

背後の相良宗介に敬意を込めた視線を向けた後、私はかなめ殿の元へと向かった。

「……こちらウルズ7。ウルズ6、聞こえるかウルズ6」

『あいよ、こちらウルズ6。どうしたソースケ。カナメに何かあったか？』

「いや……お前に聞きたいことがあるんだが、ミスリルに8歳程度の構成員はいたか？」

『は？』

「桃色の髪をポニーテールにした、つり目の少女だ。……見覚えはあるか？」

『いや、見たこともねーし聞いたこともねーけど……その子がどうしたんだよ？』

「……すまん。知らないんらいいんだ。ではな、クルツ。近所の女の部屋を覗き見るのは程々にしておけ。お前は隠しているつもりだろうが、マオにばれていたぞ」

『………。そ、ソースケ。それは一体いつ頃の——ブツツ』

「……あの少女。一体何者なんだ……」

ボン太くん、痛い子と会う

「我が名はフェイト！ フェイト・テスタロッサ！ 我こそは——悪を断つ剣なり！」

「なん、だと……!?!」

「ふも、ふも……!?!」

黒い斧を高く掲げて、意気揚々と宣言した金髪の女。そして露骨に驚くあたしとボン太くん。

……いや待て、一旦落ち着けあたし。ひとまず状況を整理するんだ。何がどうなってこうなったのか纏めるんだ。今あたしたちの目の前にいる、斧を掲げて斬艦刀とか言っちゃってる手遅れなっはぽい奴が誰なのか思い出すんだ。

えーつと、あたしたちははやてたちが来るまでアリサの家の庭にいる犬たちと遊ぶことにして「…………ふっ、今のは決まったね」遊ぼうとしたらジュエルSEED取り込んだっぽい犬が「うーん……でもやっぱり迫力が足りないような」出てきて。ジュエルSEED回収しようとしたらいきなりこいつが「よし、もう一回！ 黙れ！ そして聞け！」…………ブチッ。

「うるせえ！ 少し黙れてめえ！」

「我が名はフェイト……ひっ!?!」

あまりにもうるさいので一喝。そうしたら女はどっかの国の外務大臣みたいな悲鳴を上げて縮みこんだ。

………。

「なあ」

「ひっ」

「おい」

「ひっ」

「………アイゼン」

「ひっ!?!」

なんとなくアイゼンをセットアップしたら、女は斧を抱えて更に縮こまってしまった。

いや、登場初期のちよつとだけ親分っぽい態度はなんだったんだよ。めちやくちや扱いに困るんだけど。ていうかひつひつうるせえ。

「なあボン太くん。こいつどうしよう……って、ボン太くん？」

「……ふも、ふもふもお……」

未だに縮こまっている女をどうするか尋ねるために横を見ると、何故かボン太くんは地面に四つん這いになって落ち込んでいた。

……って、ボン太くんが落ち込んでる!? あのボン太くんが!? いつもふもふも言っていて凄い元気で、最近近くの公園でカシムカシム言いながらブランコ占拠してたおつちゃんを華麗にぶつ飛ばしたボン太くんが!?

「お、おい！ 一体どうしたんだよボン太くん!？」

「ふ、ふもふう……」

慌ててボン太くんの肩に手を置いて、ボン太くんの言葉を聞き取るうとするが、何故か今回に限って何も聞き取れない。

普段は一字一句聞き取れるつてのに……どうして今は何も分からないんだ？

「ボン太くん！ なんとか言ってくれよ、ボン太くん！」

「ふも、ふもふもふもっふ……」

「え？ 『夢も希望も、ないんだよ』？ あ、そうなんだ」

ボン太くんがそう言うんならそうなのかもしれない。

……って、今聞き取れたぞ!?

「な、なあ！ 少し前に呟いてた内容もう一度……」

「……わ、私はあれぐらいの脅しに負けない！ 負けないもん！

こほん。あー、その子！ その犬に宿った災厄の種を巡って私といざ尋常に——」

「あー、もう！ 黙ってろって言っただろ!？」

さつきから色々とうるさいから、女に向けてアイゼンを振るう。だけど女は「ひうっ!？」と悲鳴を上げながらもアイゼンを避けて、目標を失ったアイゼンは女の足元にいた犬（inジュエルSEED）にぶつかった。クリーンヒットだったのか、犬はどこか悲しげな雄叫びを上げると普通に元の姿に戻って、普通にジュエルSEEDの暴走は止

まった。

「……………」

「ふも……ふもふもお……」

あたしと女の間を気まずい沈黙が流れる。BGMは未だに何かを嘆いているっぽいボン太くんの涙声(?)。

……あれ、これってあたしが悪いのか？ むしろ悪くない気がする。経緯はどうであれ、ジュエルSEEDを封印したんだから褒められて然るべきだと思う。けどなんなんだ、この言い表しようのない気まずさは。なんかこう、二人プレイとか出来るゲームで『俺がボスのHPギリギリまで削るから、お前がトドメを刺せよ!』って言つて、加減を間違えてボスを倒しちやっただ感じの雰囲気似ている気がする。……いや、そんなことしたことないけど。

「……………ふ、ふふふ……」

などどうでもいいことを考えていたら、突然女が笑い始めた。どうしよう、あたしのせいで更におかしくなっちゃったのか……？ と、本格的に心配していたら。

「成程……今理解したよ。」

あなたは、私のライバルなんだね!？」

ずびしっ！ というセルフ効果音とともにあたしを指差して、勝手にライバルに決定された。

……いやいやいやいや。何勝手にあたしをライバル認定してやがんだ、このやろー。

「おい、お前。ちよつと待っ——」

「つまりあなたは私と同じようにジュエルシー……じゃない、災厄の種を集める使命を悪の組織である『水銀』^{「アマルガム」}から命じられたエージェント……なれば、たった一撃で災厄の種に取りつかれた哀れな小羊を救済したのも頷ける……相当な凄腕だね」

「いや、小羊じゃなくて犬だったぞ。……って、そうじゃねえ。だからあたしの話を——」

「だけどー。だからと言って私は屈しない！ 私は《^{「グラントマスター」}大魔導師》足る母の願いを叶え、世界に平和を齎すために戦う正義の戦士！

『水銀』……あなたたちの野望は、この私が切り裂いてみせる！」

「お前、あたしに何か恨みでもあんのか？」

無駄にキラキラとした笑顔で、身体中がかゆくなるようなことをのたまってくれた女。あたしに恨みがあるとしたか思えない。そうできやこんなあたしの心をずぶずぶと抉っていくなんてことを出来るわけがない。正直言っであたしのHPはもう0だ。というかむしろマイナスだ。

あたしが絶望していると、正義の戦士(笑)はフツと笑いながらあたしに背中を向け。

「その災厄の種は次会う時まで預けておくよ、《クリムゾン・ナイト紅の鉄騎》。だけど覚えておくことだね。この私……フェイト・テスタロッサは、決して挫けないということを！」

何故かあたしの通り名に変なルビをつけた後、「ふっ、これは決まった……」と呟いて、ドヤ顔しながら飛んで行った。

正義の戦士(笑)——フェイトが去って行った後に場に残されたのは、まだ嘆き続けているボン太くと、とりあえず暴走してみたはいけど何も出来なかったジュエルSEED。そして……さっぱり状況を理解出来ないままライバルにされたあたし。

「………ヴィータ」

不意に背後からあたしを呼ぶ声。振り向くとそこには、どこか達観したような表情を浮かべているはやて。

あたしが呆然としていると、はやてはスツと両腕を大きく開いて。

「ええんよ」

「え……？」

「泣いてええ……ヴィータは今、泣いてええんや」

その言葉を聞いた瞬間。

あたしは……はやての胸の中で、さめざめと泣いた。

「………良い話風に終わらせようとしてるとこ悪いんだけど、私にはさっぱり状況が掴めないわ」

「……ヴィータちゃんは今置かれているポジションは、本来なら私の物のような気がするの……くう、何故だか無性に悔しいの。ねえ、なんでだろう《ゴールドイオン・オーガ金色の夜叉》」

「うん、なのははちよつと黙ってなさい」

「ふも、ふもふもつふ……」

「なんで落ち込んでるか知らないけど、ボン太くん今回何かした？」

——とあるマンシヨンの一室にて。

「ただいま、アルフ！　ねえねえ聞いて！　今日私にライバルが出来たんだよ！」

「お帰りフェイト。そっか、友達が出来たんだね。そりや良かった。で、ジュエルシードは……」

「世界の運命をも左右しかねない災厄の種を巡って巻き起こる、私と《クリムゾン・ナイト紅の鉄騎》の戦い！　戦いの果てに芽生える友情、そして明らかになるお母さんと『アマルガム水銀』の野望！　『アマルガム水銀』と手を組んだお母さんにも立ち向かう私と《クリムゾン・ナイト紅の鉄騎》！　……いいね、ナイスな展開だよ。アニメ化希望だね」

「……リニス。あんたがどっかから拾ってきた漫画本を読ませさえしなれば、フェイトは、フェイトは………恨むよ、あんちきしょう」
狼の使い魔は、さめざめと泣いた。

はやて、温泉旅行に誘われる

『温泉だよ、はやてちゃん!』

「はあ」

電話の向こうから鼻息荒く『温泉っ、温泉っ!』と捲し立ててくるのはちゃんに、私は曖昧な相槌だけを返した。

が、それがどうやらお気に召さなかつたらしく。小学3年生にして重度なスパロボ厨というお先真つ暗な彼女は、『何言ってるの!』と語気を強くして、

『温泉だよはやてちゃん! このキーワードを前にして昂らない人はいないよ! ——あとさり気なく私を馬鹿にしなかつた?』

「なのはちゃんの場合は温泉が二つに割れてその下からロボットが出てくるとかやろ。——馬鹿にはしてへんよ、コケにしたらだけや」

『乙女のロマンを馬鹿にするんだね……!?! ——あと私は苔じゃないよ!』

「ああうん、ごめんごめん。色々ごめん、私が悪かつたわ」

ツツコミポイントが散乱してたけど、いちいち拾ってたらキリがないからスルーや。なのはちゃんのアホの子加減に磨きがかかったのに驚いてたのも少しあるけど。

で、

「温泉って、どういうことなん?」

『ラッキースケベイベントが起きる場所だよ!』

「またな」

通話終了ボタンを押すと、煩惱塗れのスパロボ厨の声は聞こえなくなった。悪霊退散、私はまだまともでいたい。

「はやてちゃん、今の電話誰からだつたんです?」

一緒に昼食の料理中だったシヤマルが問いかけてくる。

とりあえず逆手に持った包丁を置いてくれへんかな、物理的にも私の精神衛生的にも悪すぎる。

「苔……やない、なのはちゃんやよ。なんか温泉がどーたら言ってたけど」

「温泉？」

「ああ、そこから説明せなあかんかあ」

さて、どう説明したもんか。一言で言ってしまったえば『広いお風呂』なんやけど、それじゃあんまりにもあんまりやよなあ……。

「——私が説明しましょう、主はやて」

「シグナム？」

私が説明する言葉に詰まっていると、ソファに座って雑誌を読んでいたシグナムが話に混じってきた。

『そげぶとらべる』と書かれた雑誌片手に、シグナムは左手を無い胸に当てて、

「いいかシャマル。温泉というものはだな……地中から湧出する温水、鉱水、および水蒸気、その他のガスで、温泉源での温度が25℃以上のものか鉱水1kg中に定められた量以上の物質が含まれているもののことを指すんだ」

「え？ え、えーつと……」

「ふつ、わかっている。これだけではあまりピンとはこないだろう。だが、ここからが本番だ。」

——ついでこれる奴だけついてこいッ！

シグナムが？シグナム？になってもうた。けど急に歌いはせーへんよ。……大丈夫やろか、このネタ。

私がセーフアウトの線引きについて考えているうちに、シグナムの温泉講義は加速していた。温泉は効用がなんだとか、温泉に浸かりながら見る景色に飲む酒は最高だとか。飲んだことあるかどうかは知らんけど、今の姿で飲んだらあかんで、絵面的に。

「しっかし、シグナムやけに温泉に詳しいな。いつの間にそんな」

「ああ、前に私の家——お父さんのお店で、シグナムさんとかなめさんが一緒に雑誌を読んだよ。多分お風呂のやつだったんじゃないかなあ」

「かなめさんって確か、シグナムがよく話す人やな。近いうちに会ってみたいなあ」

「それがいいよ。お客さん同士が翠屋を通じて仲良くなるのは、翠屋

の娘として誇らしいことだから！」

「そっか、それなら良かった……ちよいさあ！」

「ぐふっ!？」

不法侵入者なのはちゃんのどてっ腹に拳一発。あまりに見事に決まったので、思わず「成敗イ！」と叫びたくなるどころやね。

「で、どうしたんなのはちゃん。不法侵入かますほどネタ放置されたのが悔しかったんか」

「う、うう……それもあるけど、だってはやてちゃん、本題入る前に電話切っちゃうから……」

床に蹲り涙目になりながら答えるのはちゃん。本題入るまでが長すぎるから切ったんやで？

「まあええわ。それで、本題ってなんなん？ 大方、『一緒に温泉行こうよ！』とかそんなんやと思うけど」

「……………わかってるのに切ったの？」

「誰かさんがラッキースケベがどうこう言い出すからや」

なのはちゃんの反応から察するに、やはり温泉旅行のお誘いだっらしい。

温泉旅行。なるほど、悪くない。ちょうどシグナムのマイブームが温泉のようだし、みんなの思い出を作る良い機会になると思う。うん、悪くないと思う。

……けど、けどやな。

「なのはちゃん、あのな？」

「心配しなくていいからね。既にはやてちゃんたちの分のレンタカーは予約済みだから！」

「何してんの!？ いや、別に温泉旅行のお誘い自体は嬉しいんやけど……」

「けどっ。」

首を傾げるのはちゃんに、私はとある方向を指差して見せた。

なのはちゃんはその方向に顔を向け……首を傾げる角度をより一層大きくした。

「ヴィータちゃんとボン太くんがいるだけ……なんで二人してうつぶ

せになつてるの?」

「ああ、どうにも前にアリサちゃん家に遊びに行ったときに何かあったらしくてな、あれ以来ずっとああなんや。

それはええねん。問題は、ボン太くんや」

「ボン太くん?」

そう、リビングで「ふもつふう……」やら「あたしは《クリームソーダ紅の鉄騎》じゃねー……」やらヴィータと一緒に呻いてるボン太くんのことや。

「えっ、まさかはやてちゃん、ボン太くんは温泉に連れて行かないとか言うつもりなの? ひどい、ひどいの! ゲス! 外道! ツツコミ担当! 私は苔じゃないもん!」

「まだその話題引き摺ってたん? いや、ボン太くんだけ仲間外れとかそういうことじゃないねん。ないんやけど……」

そこまで言つて、私は言葉を区切る。

そして脳裏に思い浮かべるのは、件の彼(?)——ボン太くと過ごしたこれまでの日々。

……そこそこ人気マスコットキャラクターなボン太くんそのままな外見。

……肌(?)の質感は着ぐるみのそれ。

……「ふもつふ」としか喋らない。

……口は開かないのに、どこからか食べ物を摂取する。

……そして、首と胴体の間にある繋ぎ目。

これらの要素を前に、私は一つの事実を確信していた。いや、正直確信するの遅すぎちゃうかなー、と自分でも思うけど、とにかく確信したんや。

「ボン太くんの中には、人がおる……! おる、はず……!」

そんなボン太くんが、ボン太くんが……!

「温泉入つても、大丈夫なんか?」

着ぐるみ、駄目にならんかな!」

未だ直接対面したこともないボン太くんの中の人を心配する私に、なのはちゃんは「んー?」とわけがわからないと言った風に口に人差し指を当てて、

「どうしてはやてちゃんそんなこと気にしてるの？」

「……そんなこと？ そんなことやて？ これは一大事なんやでなのはちゃん！ 着ぐるみが水を吸ったらとんでもないことになるのは必至、ぐつでぐでのびっちゃんびちゃや！ 大惨事スーパー着ぐるみ大戦やで!？」

「はやてちゃん。さすがの私でもそのギャグは引くよ」

一番はっちゃんけている人に引かれた。ショックデカイ。

「ともかく、ボン太くんが温泉入れない以上、今回のお誘いはお断りさせてもらうことに……」

「いや、そのさ。仮にボン太くんの中に人がいるとしてさ。ボン太くん、家の中でお風呂入ってるでしょ？」

「ん？ そりやな。家族やもん、私の目が黒いうちは清潔にしてみらうでー!」

「ボン太くんが入ったあとのお風呂はどうだった？」

「普通に決まってるやんかー。もーなのはちゃんさつきから何言ってる……」

……ん？

何か、私自身が言ってることに違和感があったような、なかったような。ん？ んー？

もによもによと悩み始める私に、なのはちゃんはすべてを終息……いや、むしろ始まりとなる一言を放った。

「——ボン太くんは、お風呂、入ってるんだね？」

なのはちゃんの言葉に呆然としながらも、私は視線だけでボン太くんを見た。

ボン太くん。ある日、突然私の前に現れた謎の生物(?)。ともに過ごす中で浮上した着ぐるみ説。

——中の人などいない。

人類史上、誰もが触れることを躊躇ってきた禁忌に、触れるときが来たのかもしれない——。

——とあるマンションの一室にて。

「アルフ！ 温泉に行こう！」

「……フェイト、急にどうしたのさ」

「フフフ……聞いて驚くがいいよ！ なんとこの温泉がある方面に、災厄の種の魔力反応を感知したんだよ！」

「なんだって!? わかったよフェイト、そのジュエルシートを回収しに行くんだね！」

「うん！」

「ああ……やったねプレシア、あのフェイトがちゃんとあんたの言いつけを守ってるよ。やっとリニスの影響が抜けてき……」

「災厄の種がある場所で待ち構えていれば、災厄の種を巡るライバルである《紅の鉄騎》クリムゾン・ナイトも必ずやってくるはず……。《電ナイト・オブ・サンダー気騎士》

こと私と《紅の鉄騎》の2度目の邂逅！ 二人は刃を、言葉を交わし、互いのことを知ってゆく……次回！ 雷電の電気騎士、第2話！

『雷電と紅、交わる時！』、乞うご期待ッ！

……いいね、痺れるねっ！ ねえねえアルフ、どうかな!？」

「リニスーッ！ 一発ぶん殴ってやるから生き返ってこいこのバカ野郎！」